
エターナルアビリティ

☆あにい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エターナルアビリティ

【Nコード】

N1787G

【作者名】

☆あにい

【あらすじ】

ただ平和な日々が流れていた地上。しかし、この世界には上（天界）と下（地下世界）が存在していたのだった

●キャラ紹介●

オオトリタクヤ
■鳳拓也

普通に生活していた高校一年生

しかし、ある時拾った石により運命を変えられてしまい

【風】の能力者となる

性格は熱くなりやすいが、困っている人を放っておけない
でも実は面倒くさがりである

□ミナモ

自称「天界から来た天使」と言っているが

実は本当に天界から来た天使である

拓也が拾った特殊な石を探して地上世界に来ていたが、その時何者
かに天使にとって大切な【聖天具】を奪われてしまう

後に、拓也と共に聖天具を取り戻すために動く

性格は明るく前向きである

■鳳源十郎

拓也の祖父

そして、拓也に鳳流の剣術を教えた人物である

能力や天使の事をすんなり受け入れたある意味凄い人
まだ見せてはいないが剣術の腕はかなり高いようである

□モエ

地下世界第一階層で祖母と暮らしている女の子
年は中学生くらい

【火】の能力者

しかし、まだ上手く使いこなしていない
祖母の手作りである杖を愛用している

□モエの祖母

占い師であると同時に、能力者の強さ等を瞳を見ることが出来る

モエ以外には家族はいないようだが・・・

■ヴァン

地下世界第1階層で拓也が出会った【鉄】の能力者

触れたものを鉄に変えることが出来るため、その場で武器を作り出すことも可能

ただし、人や動物などの生き物や金属を鉄に変えることは出来ない
地下世界に存在する【組織】には属していない能力者

■リユート

地下世界に存在する【組織】に属している【水】の能力者

【組織】の中では年下の方でありながらかなりの才能を秘めている
主にレイドと行動を共にすることが多い

一度拓也と接触し、拓也に興味を持つ

■レイド

地下世界に存在する【組織】に属している【雷】の能力者

リユートとともに行動することが多いが、リユートほど積極的には動かない

何やらリユートに対しては【組織】の仲間というだけではない強い
想いを持っているようだが…

第1話：手に入れた力

いたって普通の生活をしていた青年。

名前は鳳拓也といった。

「ふう・・・」

ため息をつきながら空を見上げる拓也。

毎日代わり映えのしない生活に、少々退屈していた拓也。

彼は今祖父母と共に暮らしていた。

両親は離婚しており、その際に母親は家を出ていった。

その後、父親は拓也を祖父母に預けた後行方不明になったのだった。

「何か面白いことでもあればこの生活も変わるのかな・・・」

休日な一日をいつもと同じようにまったりと過ごしていた拓也。

と、その時空に流れ星のような物が通過していったのを目撃した拓也。

「今の何だ・・・」

それを目で追いかけていくと、ある場所に落ちていったように見えた。

「学校の裏山辺りか・・・どうせ家でじっとしていても暇だしな・・・様子見に行くか」

そう決めた拓也は支度をして裏山へと向かっていくのであった。

裏山まではそんなに遠くない距離なので、そう時間もかからずに到着した拓也。

「さっきの・・・どの辺りだ？」

正確な場所はわからないので、適当に探し回った拓也。

「ん？」

ふと木の上を見た拓也。

「あれは・・・」

よく見ると木の枝に、緑色の淡い光を放っている石が引っかかっていた。

「とってみるか・・・」

一気に木を登り引っかかっていた石を取るとそこから飛び降りた拓也。

「珍しいな・・・光を放つ石なんて・・・まあ、そこまで興味がある訳じゃないけどな・・・」

だがそんな時、拓也は手を滑らせて緑色の石を落としてしまった。

そしてその石が地面の上に落ちた瞬間、その石から物凄い風が吹き荒れたのだった。

「な、何だ!？」

驚く拓也。

そして、石から放たれた風は拓也を包み込んでいった。

「一体何なんだよ」

訳が分からずこの場から離れようとする拓也だが、自分を包み込んでいる風が壁となり出ることが出来ないでいた。

「さっきの石からこの風が出てんのか・・・」

落ちている石を見る拓也。

と、拓也を包んでいた風がゆっくりと動きを変えていった。

そしてその風は吸収されるように拓也の身体の中に消えていった。

「今の風何だったんだ・・・それにさっきの石・・・無くなってるし・・・」

とりあえずこれ以上何も起きそうにないので帰ろうと歩き出した拓也。

と、そんな時

「あーっ!!」

そんな大きな声が背後から飛んできたのであった。

第2話…ミナモ、登場っ!!

「な、何だ」

いきなりの叫び声に驚いて振り返った拓也。

と、拓也の目の前に知らない女の子の顔があった。

そして、二人は思いきりぶつかったのだった。

「!？」

ぶつかった勢いで弾き飛ばされた拓也は、そのまま木に激突した。

そして女の子の方は、そのまま地面に倒れていた。

「今の何なんだよ・・・」

そう言いながら起きあがる拓也。

「いてて・・・さっき確かに反応あったのに・・・」

涙を浮かべながらそう呟いた女の子。

ぶつかってかなり痛かった模様である。

「お前・・・いきなり・・・」

「ねえ!さっきこの辺りに・・・」

拓也の言葉を見殺して話し始める女の子。

「って、人の話を聞け！」

そう女の子に怒ってしまう拓也なのであった。

「はい・・・」

反省したのか何なのか、いきなり地面の上に正座をして座った女の子。

「いや・・・何もそこまでしなくてもいいんだが・・・」

少々呆れている拓也。

と、女の子がじっと自分を見ている事に気付いた拓也。

「えっと・・・とりあえず自己紹介した方がいいか・・・俺は鳳拓也・・・お前は？」

「はい♪私はミナモ、天界から来た天使なんです」

笑顔で元気よく自己紹介するミナモ。

「・・・」

無言でミナモを見る拓也。

「どうしたんですか？」

そう聞くミナモ。

「いや・・・ありえないだろ・・・天界とか天使とかって」

そう言う拓也。

「証拠ならありますよ・・・んっ・・・」

ミナモが力を込めると背中に小さな天使の翼が出現した。

「随分と小さいな・・・飛べるのか？」

尋ねてみた拓也。

「一応飛べますよっ！でも・・・本当は・・・もっと大きな翼だったんです・・・」

徐々に元気のない声になっていったミナモ。

「何があったんだ？」

そんなミナモの事情を聞こうとする拓也なのであった。

「実は・・・前にここに来た時に天使にとって大切な【聖天具】を奪われちゃったんです」

そう告げたミナモ。

「聖天具？」

「はい、私達天使が一人に一つずつ持っているアイテムでそれが天使の力の源なんです」

そう説明したミナモ。

「俺にはさっぱりわからないが・・・ようするにそいつが無くなったから翼も小さくなってるのか？」

拓也がそう言うと言ったミナモ。

「でもお前・・・と、ミナモだったか・・・一体何しに来たんだ？」

尋ねた拓也。

「えっとですね・・・何て言ったらいいんでしょうか」

少し考え込むミナモ。

「・・・」

考えているミナモを見ている拓也。

「信じられないかもしれないですけど・・・”能力”が封じ込められている石なんです」

そう告げたミナモ。

「能力・・・」

「私達天使みたいに種族が違うとかじゃなくて・・・その・・・普通の人間が自然の力とかを操れるようになったって言えるいいのでしょうか・・・」

自信なさげに答えたミナモ。

「一応天使が目の中にいるから能力ってのも本当なんだろうな」

そう思った拓也。

だがその時拓也は、少し前の出来事を思い出したのであった。

「あ・・・」

突然そんな声を上げた拓也。

「どうしたんですか？」

尋ねるミナモ。

「石だったよな・・・見たかも」

「えっ、本当ですか!!」

と、拓也に飛びつくミナモ。

「ああ、でもな・・・」

「はい？」

不思議そうな顔をするミナモ。

「消えちゃったんだ・・・」

そう告げた拓也。

「消えた・・・じゃあまさか・・・」

ある可能性を見いだしたミナモ。

「もしかしたら・・・拓也さん、掌を上にして力を込めてもらえますか？」

そういったミナモ。

「力を込めるって言われてもな・・・」

そう言いながらも言われた通りにやる拓也。

しばらくは何も起きなかったが、突然風が掌で渦巻き始めたのであった。

第3話：宿った能力（チカラ）

「なっ、何だよこれ」

集中力が途切れたからなのか、風は消滅してしまった。

「やっぱり・・・拓也さんに・・・」

何かを確信したみたいに言うミナモ。

「ミナモ、何なのか説明しろ・・・あの石何なんだ」

そう言う拓也。

「簡単に言うとな能力が封じられた石・・・基本的には適正さえあれば誰でも能力者になれる石です」

そう説明したミナモ。

「能力者・・・って、俺がか！」

驚いている拓也。

「だってさっき風の力使ってたじゃないですか♪」

何故が明るく言うミナモ。

「お前な・・・」

呆れる拓也。

「でもこれで本来の任務の方も達成できなくなりましたし・・・どうしましよう・・・」

落ち込み気味のミナモ。

「お前どのみち上には戻れないんだろ・・・どうするんだ？」

そうミナモに尋ねた拓也であった。

「・・・聖天具を取り戻しに行きます」

そう言いになったミナモ。

「取り戻しにつて・・・何処にあるか・・・」

拓也がそう言う

「見当はついてます・・・たぶん・・・地下世界です」

「天界の次は地下かよ・・・」

何やら呆れている様子の拓也。

「奪われたのは私のミスですし・・・私が取り戻さない！」

意気込んでいるミナモ。

「ミナモ・・・俺は天界や地下世界の事なんて何も知らなかった・・・」

でも本当に存在しているんだよな」

そう言った拓也。

「知らないままの方がいいこともあります・・・でも拓也さんは”能力”を持ってしまった・・・だから知る必要があるのかもしれないね」

そう拓也に告げたミナモ。

「・・・なら家に来いよ」

「はい？」

いきなりの事で頭の上に”はてなマーク”を浮かべたミナモ。

「こんな所で立ち話もあれだろ・・・大事な話っぽいし・・・今家は誰もいないしさ」

「拓也さんがよろしければ・・・」

「じゃ決まりだな」

そんな訳で拓也はミナモを連れて家に戻っていったのであった。

第4話：鳳の力、風的能力（1）

そんな訳でやってきた鳳家。

「あの・・・拓也さん・・・」

何故か小声で話しかけるミナモ。

「ん？何だ？」

ミナモの方を向く拓也。

「拓也さんって何人でこの家で住んでらっしゃるんですか」

そう聞いたミナモ。

「俺とじいちゃんとかあちゃんの三人だな」

普通に答える拓也。

「にしては・・・拓也さんの家・・・大きすぎませんか。それとも地上世界の家をよく知らない私の勘違いでしょうか」

ミナモがそう言う

「俺の家系何か凄いつて前にじいちゃんが言ってたな」

そう答える拓也。

「そうなんですか・・・」

ただ驚くばかりのミナモ。

「まあ、遠慮せずに入れよ。お茶ぐらいは俺も出せるしな」

そして、ミナモは拓也の自室に案内された。

「ほら、お茶」

「ありがとうございます」

拓也からコップを受け取りお茶を飲むミナモ。

「ここなら落ち着いて話も出来るだろ」

「はい・・・じゃあ私達の住む天界に残っている昔話から・・・それが今のこの世界の始まり」

そしてミナモは話を始めていくのであった。

「今私達がいる地上世界・・・この世界ではあまり残されていない話なんです・・・」

「まあ、俺も天界や地下世界の存在は今知ったわけだしな」

そう言う拓也。

「でもその昔・・・世界は一つだけだったんです・・・この地上世界だけ」

そう告げたミナモ。

「元は一つって・・・昔にも天使とかはいたんだろ？お前の話じゃ」
そう言う拓也。

「はい、昔は例え種族が違っててもみんな仲良くやっていました・・・」

そう話していくミナモ。

「でも・・・」

「!？」

わずかだがミナモの声のトーンが変わったのに気付く拓也。

「ある時からその世界で争いが起きるようになってしまったんです」

そう言うミナモ。

「ある時って・・・」

「拓也さんもすでに関わっている・・・【能力】と呼ばれる力です」
そう告げたミナモ。

「能力で争いが・・・」

「元々能力というものは私達天使が持っていたものだっただけですが、何らかの要因でその力が外部に伝わってしまい・・・今でいう地上の人たちが能力を持ってしまったんです」

そう説明していくミナモの表情は、話が進む度真剣になっていくのであった。

「その後は・・・”平和”な姿は何処にもありませんでした」

そう言い拓也の目を見たミナモ。

「能力者による地上の争い・・・その影響は平和を望んでいた天使達にも及びました」

「天使は戦ったのか？天使って言うくらいだから・・・」

拓也がそう言うと

「確かに天使は普通の人達が持たない不思議な力を持っています・・・また、翼で空を飛ぶことも・・・ですが、本来天使達は争いを好まない種族なんです」

そう説明したミナモ。

「当時の天使のリーダーたちは【聖天具】の力を使い能力者達を止めたと言われています・・・しかし、止めてもまた新たな能力者が地上を支配しようと動き出す・・・天使達は繰り返し返されるこの状況に耐えきれず地上を離れる決意をしたんです」

徐々に語られていく過去にあった事実。

そして、そんな話にいつの間にか拓也は聞き入っていたのであった。

「それで天界にか・・・」

そう呟く拓也。

「はい・・・」

「じゃあ地下世界ってどういう感じで出来たんだ？」

拓也が尋ねると

「それについては天界に資料がないので・・・よくはわからないんです」

そう答えたミナモ。

「そっか・・・」

「私は聖天具を取り戻さないといけません・・・そのために地下世界へ・・・」

「能力者達の世界か・・・」

そう呟く拓也。

『ふむ、何やらワシがない間に大変なことになっているようじゃな拓也よ』

「!?!」

突然背後から声がして振り返った拓也とミナモ。

「じいちゃん!?!」

驚いている拓也。

そこにいたのは拓也の祖父・鳳源十郎だった。

「この方が拓也さんのお爺様ですか」

そう言うミナモ。

「立ち聞きしてしまったが状況は悪いようじゃな」

「私の話を・・・聞いていたのですか?」

「うむ・・・」

頷く源十郎。

「天使のこととか能力の話も・・・」

「聞いたときは驚いたが・・・その話に偽りはなさそうじゃな・・・
そのお嬢さんは純粹そうじゃからな」

そう言う源十郎。

「じいちゃん・・・」

「拓也、彼女を助けるつもりじゃな・・・」

源十郎はそう拓也に告げたのだった。

「ああ・・・聖天具には関わってないけど・・・俺の中の”能力”はミナモが探していたものだったしな・・・」

「拓也さん・・・でも・・・地下の人達は・・・」

「話からすると能力者だらけみたいじゃな」

そう告げる源十郎。

「大丈夫だって、俺だって今はその能力者だしな」
自信を持って言う拓也。

「ふむ・・・」

と、静かにそう呟いた源十郎。

「じいちゃん？」

「確かにお前はワシが教えた鳳の剣術がある・・・まあ、ワシが留守にしている事が多いから半分は我流で学んでいたようじゃが」

源十郎がそう言うと

「だったら心配いらないだろ？じいちゃんの剣術に能力が合わされ

ば」

そう告げた拓也。

「ミナモさんとやら・・・能力と武器というのは合わせることが可能なのか？」

そう尋ねた源十郎。

「詳しくはわかりませんが・・・多分・・・」

あやふやながら答えたミナモ。

「拓也よ・・・今のまま地下に乗り込み”本当の能力者”と戦っても勝ち目はない・・・これは剣道等の試合ではないのだからな」

「じゃあ・・・どうするんだよ」

「ワシと特訓だ・・・最低一つ・・・鳳の剣術と能力を合わせた技を編み出してみろ」

そう拓也に言い放った源十郎であった。

第4話：鳳の力、風的能力（2）

場所が変わって屋外。

鳳家の庭。

そこで拓也の特訓が行われていた。

「鳳流・飛斬一閃」

構えた刀を横に真っ直ぐ振るう拓也。

「鳳流の中でも一番簡単な技だ・これならばすぐにとはいかないが能力との融合技を使えるようになるじやろう」

そう告げる源十郎。

「よし、やってやる！」

意気込む拓也。

「あっ、そうだミナモ」

「何ですか？」

源十郎の隣で見ていたミナモはそう言った。

「能力ってどうやって使うんだ？」

そう尋ねた拓也。

「そう言えば使い方の話してませんでしたね」

苦笑いしながら言うミナモ。

「じゃとするとまずは能力の発動からの練習じゃな」

そう決定した源十郎なのであった。

「でもさミナモ・・・」

ミナモに話しかける拓也。

「何ですか？」

「天使って能力持っていないんだろ？だったら能力の発動のこととかわからないんじゃないかなってさ」

そう思った拓也。

「確かに天使は能力を扱いませんけど・・・今は拓也さんが見た能力の核石とかを管理したりしてますから能力の事を学んだりしているんですよ」

ニコニコ顔で話すミナモ。

「拓也よ・・・これはワシの勝手な考えなんじゃが・・・能力も剣術を使う際の気力の集中と同じではないのか？」

そう言った源十郎。

「そうなのか？」

ミナモに聞く拓也。

「大体そんな感じですよ♪でも、能力の制御は難しいんですけどね・
・ただ放出するだけなら発動さえ出来れば・・・」

そう言うミナモ。

「発動か・・」

自分の手のひらを見つめる拓也。

「手から出すイメージとかでいいのか？」

「拓也さんがやりやすいというか、イメージしやすい方法でいいと思いますよ」

ミナモの言葉を受けて拓也は、手のひらを前に出すと意識を集中させていくのだった。

「集中・・」

と、ミナモが

「拓也さん。風の力はちゃんと拓也さんの中に宿っているはずですよ・
・いきなりで難しいかもしれませんが身体の中から風を出す感じですよ」

一応アドバイスしたミナモ。

「俺の中の風か・・・イメージしづらいけど・・・」

手のひらに力と意識を込める拓也。

「上手くいくのかのう」

そう思う源十郎。

「核石が反応したのですから適正はあるはずです・・・あとは拓也さんの技術次第ですけど・・・」

今は見守るしかないミナモ。

「風・・・渦巻くもの・・・押し出す感じ・・・」

頭の中で考えながらやっていく拓也。

それからしばらくして座り込んだ拓也。

「ダメだ・・・上手くできない」

「拓也よ・・・不慣れなことは誰だって上手くできないものじゃ・・・なら・・・」

源十郎は拓也に刀を渡した。

「じいちゃん？」

「最初からそいつで風を試すしかないようじゃな」

「ミナモ・・・」

「やってみるしかないみたいですね」

そう言う訳で刀を構えさっきのように意識を集中させる拓也。

（さっきと何かが違う・・・風が集まるのがわかる・・・）

「拓也さんの刀が・・・風を」

「センスの方はあったようじゃな・・・放て拓也よ!!」

そう言う源十郎。

「風之鳳流・旋疾一閃」

思い切り拓也は風をまとった刀を振るうのであった。

その直後拓也が放った一撃は、地面に跡を残しながら進み堀に直撃した。

「じいちゃん、悪い・・・堀が・・・」

拓也が謝ると

「構わぬよ・・・これを拓也の成長の証と思えばな」

そう言う源十郎。

「でも凄いですよ拓也さん♪こんなに早く風の力と自分の技を一つにするなんて」

喜んでいるミナモ。

「あの技は鳳流の中で一番簡単な技じゃからな・・・しかし、これからはそうはいかないじゃろう・・・覚悟は・・・と、聞くまでもないようじゃな」

そう言う源十郎。

「ああ、俺はミナモと一緒に地下世界に行く。例えそこがどんな世界だってどんな奴がいたって俺はミナモと一緒にここに戻ってくる」

そう告げた拓也。

「ふむ、なら戻ってきたら本気の勝負をしようかの・・・どれほど強くなっているか楽しみじゃ」

そう言う源十郎。

「絶対にじいちゃんに本気出させるくらい強くなるからな」

そう意気込む拓也。

「二人とも明日には家を出るつもりじゃろ・・・ならば今日はゆっくり休むといい・・・これから起こるであろう困難に備えてな」

そんな訳で、拓也とミナモは明日の出発に備えてしっかりと休むのであった。

第5話：出発

翌朝。

いつも朝の稽古等があるため、早起きな拓也。

しかし、今日はいつもとより少しばかり早く目が覚めていた。

（じいちゃんやミナモはまだ寝てるか）

そう思いながら起きあがる拓也。

外は丁度明るくなり始めた頃だった。

「そういや地下世界だから日の光ないんだよね・・・」

じつと東の空を見る拓也。

「絶対にここに戻る・・・」

そう自分に言い聞かせる拓也。

「眠れなかったんですか？」

と、いつのまにか自分の横にいたミナモ。

「俺はいつも早起きだからな。それよりミナモこそ眠れなかったのか？」

聞き返した拓也。

「私は天使ですから・・睡眠時間少なくとも大丈夫ですよ」

そう告げたミナモ。

「そっか・・」

「・・・・・」

しばらくの間続く静かな時間。

「お前の大事なものの取り戻して・・生きてここに帰ろうぜ」

「はい、約束です」

そう言い微笑み合う拓也とミナモ。

そして、その様子をしばらく見ていた源十郎は家の中に戻っていったのであった。

その後三人で朝食をいただいた。

「しっかり食べておかないとな」

「はい♪」

そして出発間近。

「じいちゃん・・・」

「そんな顔をするでない・・・ワシはお前達が戻るのを待っておる」

そう言う源十郎。

「はい、必ず戻ってきますから・・・私のせいで拓也さんも巻き込んでしまいましたから・・・」

「別に俺は大丈夫だからさ・・・」

ミナモにそう言う拓也。

「気をつけてな・・・」

「行ってくるぜ、じいちゃん！」

そう告げ拓也とミナモは鳳家をあとにしたのだった。

「そう言えば地下世界への道・・・知ってるのか？」

歩きながら尋ねる拓也。

「それは大丈夫ですよ♪能力の石を探すついでに調査してましたから」

そう答えるミナモ。

「ミナモ、戦いなら俺に任せておけよ・・・聖天具がないと力出せないんだろ？」

拓也がそう言う

「そんな事ないですよ天使の翼だって使えますから、攻撃の力も使えるはずです」

そう答えたミナモだが、微妙な不安が残る拓也。

「とにかく地下世界へ急ぎましょう」

そう言い駆け出すミナモなのであった。

しばらく歩いていた二人。

ミナモについては地下世界での行動のために、先ほどから小さな翼を羽ばたかせ宙に浮いていた。

どうやら力を失った今の状態で、どれくらい力を使えるか試しているようだった。

「それはいいんだが・・・ミナモ・・・」

「はい？」

自分の真上にいたため、見下ろしながら言ったミナモ。

「今力使ってたらあとでバテるぞ」

そう忠告した拓也。

「大丈夫です♪私は天使ですから♪」

「どういう理屈なんだ・・・」

そう感じる拓也。

「飛んでるのは良いけど・・・道案内も頼むぜ」

「はい♪」

元気よく返事するとミナモは下に降り、天使の翼を消した。

「こっちの山の中ですよ」

その場所は拓也がミナモと出会った場所から少し離れたところのようだった。

「こんな山の中にか・・・」

拓也が驚いていると

「とりあえずはですけど」

「とりあえず？」

「地下世界への出入り口は他にも何カ所があるらしいので♪街の中にもあるかもしれませんけど」

そう言うミナモ。

そして二人は、山の中にある洞窟の前にたどり着いたのであった。

「ここか？」

そう聞く拓也。

「はい♪地下への入り口っぽいでしょ」

何故か元気に答えるミナモ。

「じゃあ、いくか」

一足先に洞窟内に入ろうとした拓也。

だがミナモは、さっきとは打って変わって何やら不安そうな表情で立ち止まったままだった。

「ミナモ？」

「この先へは私も行ったことはありません・・・地下世界への出入り口ですから罠とかもあるかもしれません・・・だから・・・」

と、拓也はミナモの元に戻ると頭の上に手を置いた。

「？」

不思議そうな表情を見せるミナモ。

「それも承知で地下世界にいくんだ・・・それに一人じゃない・・・だから不安なんて無いさ」

「拓也さん・・・」

ちよつと微笑むミナモ。

「行こうぜ・・・ミナモは不安かもしれないけどさ・・・そんなもの俺の風で吹き飛ばしてやるからさ」

そう告げた拓也。

「はいっ♪」

再びいつもの笑顔に戻るミナモ。

「それじゃ・・・」

「地下世界に突入です♪」

不安を吹き飛ばすかのように、拓也とミナモは元氣よく地下世界へと続く洞窟へ突入していったのであった。

第6話：魔女っ娘な炎使い（1）

地下世界へと続く洞窟を進んでいく拓也とミナモ。

「どこまで続くんだ」

歩きながらそう思う拓也。

「地下世界はいくつかの階層に分かれているらしいですよ」

そう言ったミナモ。

「結構大変になりそうだな」

「大変なこと頼んですみません」

謝るミナモ。

「だから謝らなくていいって・・・」

そんな調子で歩みを進めていく二人。

更にしばらく進むと何やら光が見え始めた。

「もしかして到着か？」

「多分・・・」

その光が見える先に何があるのかわからないので、ここからは慎重

に進んでいく拓也とミナモ。

「もうすぐだな・・・とりあえず俺が先に様子を見る・・・ミナモは少し待っててくれ」

そう言ってミナモをこの場に留まらせると、拓也は一人光が出ている場所をのぞき込んだのだった。

「何だありや・・・」

普通にそう思った拓也。

「何があったんですか？」

ミナモの声が横から聞こえたので、その方を見た拓也は驚いた。

何とミナモの顔が間近にあったからであった。

「・・・お前な、待ってろっていったのに」

少し呆れながら言う拓也。

少々その顔は赤かったが・・・。

「それで・・・」

向こう側を見ようとしたのを止める拓也。

「見つかるから止めろって」

小声で言いながら止める拓也。

「誰かいるんですか？」

そう聞いたミナモ。

「ああ、見張りみたいなのが二人な・・・」

そう告げた拓也。

「他に抜け道とかはないですね」

ミナモがそう言うとき

「あるかもしれないけど・・・探してるよりあいつら片づけた方が早いぜ」

そう言いながら刀を抜く拓也。

「ミナモ、少しの間あいつらの動き止められないか？そしたら俺が一撃で決めてやるから」

そう言った拓也。

「わかりました任せて下さいっ♪」

と、ミナモは自信たっぷりになんか返事したのであった。

「と、言うわけで・・・」

何やらやっているミナモ。

「ん？」

その様子を見ている拓也。

「天使の武器と言えばこれですっ♪天使の弓」

光の中から現れた少し小さめな弓。

「何だか小さいな」

拓也がそう言う

「これも”聖天具”が無い影響で・・・」

そう告げたミナモ。

「まあいいか・・・頼んだぜ」

「はいっ！」

元氣よく返事をして弓を構えるミナモ。

と、弓の中に光で作られた矢が現れた。

「拓也さん。私が矢を放ったらすぐに飛び出してください・・・でも・・・」

何かを言おうとしたミナモだったが

「問題ないぜ。俺はミナモを信じてる」

「・・・はい、絶対頑張ります」

意気込むミナモ。

「よし」

刀を構え突入準備する拓也。

「いきますっ」

かけ声と共にミナモは光の矢を放つのであった。

「行くぜっ」

ミナモが矢を放った瞬間に飛び出していった拓也。

相手に向かって矢は真っ直ぐ飛んでいった。

そしてその矢は、見事に相手二人の身体を中心に射抜いたのであった。

「って、ミナモ！矢が・・・」

走りながらそう言う拓也。

「心配はいらないですよ♪今放った矢は普通のじゃなくて光の力で作った矢ですから物理的なダメージはありません」

そう説明したミナモ。

「じゃあ・・・」

「この矢は精神への攻撃で苦しめます」

よく見ると矢を受けた二人は、その場でうずくまっていた。

「何だかわからないけど・・・この隙に・・・」

素早く二人に近付いた拓也は、二人に刀で峰打ちをくらわせたのであった。

峰打ちをくらい倒れている二人の男。

「来ていいぞミナモ」

拓也に呼ばれ足早にやってきたミナモ。

「凄いですね。でもどうして風的能力使わなかったんですか？能力なら・・・」

ミナモがそう言う

「地上での特訓は全力で出せる状況だったからよかったんだけど、実はまだ力のコントロールが出来てないんだ・・・怪我させずに攻撃するには能力無しでやるしかなかったんだ」

そう答えた拓也。

「そうだったんですか・・・」

「さてと、こいつらが起きる前に先に進もうぜ」

「はいっ」

倒れている二人を放っておいて、拓也とミナモは道の先へ進んだ。

「!？・・・ここが・・・」

「みたいです・・・」

辺りを見渡すミナモ。

二人が見ていたもの。

それは、地下世界に作られた広大なフィールドなのであった。

第6話：魔女っ娘な炎使い（2）

「高いところから見ると遠くまで見渡せるな」

そう告げた拓也。

「地下にも街が作られていますね・・・」

そう言うミナモ。

「とりあえず街に降りてみるか・・・この地下世界のこととも色々知りたいしな」

という拓也の意見で早速街へと向かう二人。

「そういやミナモ前に地下世界って幾つかの階層に分かれてるって言ってたよな」

歩きながら聞いた拓也。

「はい、直接見てませんから詳しいことはわかりませんが・・・」

そう答えたミナモ。

「お前の”聖天具”を奪った奴の居場所探さないといけないしな」
そう言う拓也。

「はい・・・」

しばらく歩いているとようやく街の入り口に辿り着いた。

「近くで見てわかったけど何か地上の街とあまり変わらないな」

そう告げた拓也。

「元々地上に住んでいた人達ですから・・・」

そう言うミナモ。

「よし、とりあえず行くか」

街の中に突入する拓也とミナモ。

「・・・でも、無闇に人に聞くわけにもいかないしな・・・」

考えながら歩いていた拓也。

と、そんな時二人は道の脇に一人の少女が倒れているのを見つけたのだった。

「大変だ」

倒れている少女の側に駆け寄る拓也とミナモ。

「しっかりして下さい」

その少女に声をかけるミナモ。

「ううつ・・・」

と、意識を取り戻したっぽい少女。

「大丈夫か？」

「貴方・・・達は・・・」

ぼんやりとした表情で拓也達を見る少女。

「こんな所で倒れてどうしたんだ？病気か？」

そう聞く拓也。

「あの・・・少し肩を貸してもらえますか？」

そう言った少女。

「ああ、いいぜ」

笑顔で少女に肩を貸す拓也。

「ありがとうございます・・・お礼しないといけませんね」

「そんなこと気にしなくていいですよ」

そう言ったミナモ。

「いえ・・・誰も助けてくれなかったのに・・・だから私・・・」

と、少女は手に持っていた小さな杖の先端を拓也に向けた。

「えっ・・・」

「ごめんなさい♪」

何故か笑みを浮かべると、少女は杖の先端から炎を放った。

「拓也さん!?!」

驚くミナモ。

「!?!」

しかし、拓也は本来剣の修行で培っていた反射神経によりその炎を紙一重でかわした。

「ふえっ・・・!?!」

かわされて驚く少女。

「とりゃ!」

そして、これまた反射的に反撃してしまい少女は気絶してしまったのであった。

「あの・・・拓也さん・・・」

この状況を後ろで見ていたミナモがそう呟いた。

「あっ・・・」

拓也もそれに気付きとりあえず刀をしまった。

「××」

完全に気絶してしまっている女の子。

「どうしようか・・・」

「反射的に反撃しちゃったけど・・・軽くやったから怪我はさせていないはず・・・」

そう言う拓也。

「でも、このまま放っておけないですよ」

そう言ったミナモ。

「でも、俺たちはこの人間じゃないし・・・彼女が何処の子かも知らないし」

そう言う拓也。

「じゃあ、私が聞いてきます！」

そう告げたミナモ。

「聞いてくるって・・・」

「任せてください!」

そう言うのとすぐに近くを歩いていた人に声をかけていくミナモ。

(一応ここ地下世界で俺たち勝手に入ってきたんだからあまり目立たないほうが・・・)

そんな事を思っていた拓也。

だが、何やら心配な状況にはなっていなかった。

ミナモのこれでもかっといった笑顔で通行人もにこやかに話を聞いていた。

それからしばらくしてミナモが拓也の側に戻ってきたのだった。

「終わりました!」

(あれがミナモの得意技・天使のスマイルなのかな・・・)

そんな事を考えていた拓也。

「拓也さん?」

「!・・・と、どうだった?」

慌てながら聞く拓也。

「彼女はこの街に住む占い師のお孫さんらしいです・・・彼女もそれなりに有名らしくて・・・すぐわかりました」

そう告げたミナモ。

「場所も聞いたんだろ？」

「はい♪」

笑顔で返事するミナモ。

「なら、彼女を連れて行くか・・色々騒ぎになる前に移動した方がいいしな」

そう言うわけで拓也が女の子を抱えてその占い師の元へ向かうこととなった。

「えっと、こっちです」

前を歩き道を示していくミナモ。

「こういう時飛んでいければ楽なんですけど・・・」

そう言うミナモだが

「ここは地下世界だからな・・天使がいるってばれたらどうなるかわからないからな」

と、言うことでミナモは拓也に飛行を止められているのであった。

そして、程なく歩いたところで占い師が住んでいるという家にたどり着いたのであった。

「それっぽい雰囲気ですね・・・」

そう言ったミナモト。

「それはそうと・・・この看板・・・占いの他に鑑定とか書いてあるけど・・・何を見るんだ？」

そう思った拓也。

「とりあえず入ってみましょう」

と、言うことで室内に入るミナモト達。

「おや・・・お客さんかい・・・」

奥から声がしたので奥に向かう二人。

と、そこに椅子に座っていたお婆さんがいたのであった。

「あの・・・私達・・・」

「わかっておるよ・・・うちの孫娘のモエがまたやったんじやろう」

「モエ？」

「また・・・ですか？」

キョトンとしているミナモト。

「まあ、立ち話もなんだしね・・・その椅子にでも座って待ってもらえるかい・・・お茶ぐらいは出せるからね」

そう言うとお婆さんは、椅子から立ち上がり更に奥の部屋へと消えていったのであった。

第6話：魔女っ娘な炎使い（3）

とりあえず言われたとおりに椅子に座る拓也とミナモ。

「遠慮はしないでいいよ・・ほれ、お茶とお茶菓子だ」

テーブルの上にお茶とお茶菓子をおくお婆さん。

「あの・・さつきモエさんがまたやったって・・」

ミナモがそう言う

「ポイント稼ぎじゃよ・・と、いつでもあのやり方じゃよほど弱い能力者じゃなきゃ倒せないがね」

そう言ったお婆さん。

「そう言えばあいつ・・炎を・・」

そう呟く拓也。

「それよりあんたも能力者だね・・属性は・・とりあえずは瞳を見せてもらえるかい？」

「瞳？」

「それでわかるんじゃないよ・・」

と、拓也の瞳をじっと見るお婆さん。

「・・・」

そして、その様子を隣で見ているミナモ。

「属性は風かい・・・それとポイントは1・・・モエを倒して得たものだね」

「倒して得たって・・・」

「ふむ・・・あんたは能力者だけど地下世界の者ではないね・・・」

そう拓也に告げたお婆さんなのであった。

「俺達は・・・その・・・」

何とか上手く説明しようとする拓也。

「色々ないざござは大抵の大人たちは知っているが・・・あまり地上の人間を快く思っていないのは本部の連中ぐらいいさ・・・地上に一番近いワシ達は逆に歓迎するよ」

そう言ったお婆さん。

「いいのかな・・・ミナモ・・・」

「お婆さんがそう言うてくださるなら・・・」

と、ここで

「そっちの娘さん・・・天使じゃろ」

「!？」

驚く拓也とミナモ。

「ワシは占い以外に鑑定をやっている・・・能力者の鑑定だが・・・天使も瞳を見ればすぐわかる・・・能力者とも一般の人間とも違う瞳じゃからな」

そう言ったお婆さん。

「見た目は同じだけどな・・・」

ミナモの瞳を見ながら言う拓也。

「ううっ・・・」

と、ここで気絶していたモエが目を覚ました。

「起きたかい・・・モエ」

「えっ、お婆ちゃん・・・ここって自分の家・・・って・・・」

拓也達を見て動きを止めたモエ。

「えっと・・・あの・・・」

かなりパニックになっている様子のモエ。

「大丈夫だよ。私達は・・・」

笑顔でそう言いモエを落ち着かせるミナモなのであった。

「モエ、あんたも座りな。この人達は悪い人じゃないよ・・・話はワシからするよ」

お婆さんはモエに色々説明した。

「地上の能力者さんと天使さん・・・」

そう呟いたモエ。

「悪かったな・・・さっきとつさに反撃しちゃって」

謝る拓也。

「悪いのは私です・・・私能力者だけど能力の才能がないみたいで力弱くて・・・あんなやり方でしか・・・」

「気絶している間に瞳を見せてもらったがまだポイント1じゃったな・・・」

お婆さんがそう言うと

「あのやり方で倒された人がいるんだ・・・」

そう呟いたミナモ。

「気にすんなって・・・俺だって能力手に入れたばかりだからそんな

に上手く使えないしな」

そう言った拓也。

「モエよ・・・努力しないものに力は宿らない・・・確かに能力は才能に左右される所はあるが・・・努力でも能力を向上させる事は可能じゃよ」

そうモエに告げたお婆さん。

「そう言えば・・・モエさんってその杖で能力使うんですか？」

「はい！お婆ちゃんの手作りの杖です。女の子向けに少し可愛いデザインにしてもりました」

笑顔で自分の杖のことを話すモエ。

「まあ、なんにせよ・・・お前さん達はここを早く出た方がよいじやろうな」

と、突然そんな事を告げるお婆さんなのであった。

「えっ・・・」

お婆さんの言葉に驚く拓也。

「お前さんたち・・・地上から来たならどこから来た？」

「えっと・・・地上と繋がっている洞窟から・・・」

そう答えるミナモ。

「地下でも一番上にあるこの階層はいくつか地上への道があるが全てには見張りがいるんじゃないよ・・・」

そう告げたお婆さん。

「まず地上から来た奴は普通には入ってこれないからね・・・お前さんたち強行突破してきたんじゃないのかい？」

「それは・・・」

お婆さんの言葉に対して何も言えない拓也。

「そろそろ騒ぎになる頃だろうからね・・・と・・・」

お婆さんがそんな風に言っていると外でこちらに近づいてくる足音が聞こえてきた。

「誰か来ますよ・・・」

そう言うモエ。

「お前さん達は奥の部屋に・・・モエ、案内しておやり。ワシが呼ぶまで隠れておるんじゃない」

「は、はい」

と、言う訳でモエに連れられて奥に向かう拓也とミナモ。

それと同時に店の扉が開かれ何人かの男達が入ってきた。

「こんな所に何用だい」

「この辺りで地上から来た男女を見なかったか？」

「知らないねえ・・・ワシはこの店から出ていないし・・・この店にも来ていないよ」

そう告げたお婆さん。

「そうですか・・・では、見かけたらご連絡を・・・」

一枚の紙を残し男達は店から立ち去っていった。

「・・・もういいよ」

お婆さんの言葉で奥から出てきた拓也達。

「ふむ・・・意外と手が早いね・・・あまり似てないけど簡単な人相書きまであるよ」

「確かに似てないな・・・」

「これなら見つからない・・・ですよね・・・」

そう言うミナモ。

「どちらにしてもこの集落から離れた方がいいね・・・他の集落や階層に知れ渡るのも時間の問題だよ」

そう二人に告げるお婆さんなのであった。

「それってまずいいじゃないのか・・・それじゃミナモの探し物どころじゃなくなる・・・」

そう言う拓也。

「お婆さん・・・何かいい手はありませんか？」

ミナモが聞くと

「強行突破した以上お前さんたちの話はどこかしらに残る・・・まずはこの集落からの脱出だが・・・」

立ち上がるお婆さん。

「基本それぞれの集落の出入り口は大体決まっている・・・あいつ等もそこを見張っているだろうが・・・モエ！」

「はいっ」

元氣良く返事してお婆さんの前に立つモエ。

「秘密の抜け道に案内してやりな」

そう告げたお婆さん。

「抜け道？」

「非常用とかの目的で作られているのさ・・・この集落の連中が作ったものだから外の連中は知らない」

「それじゃそこを通ればここを抜けれますね」

喜ぶミナモ。

「だが、念入りにこの集落を調べられたら抜け道も見つっちゃう・出るなら急ぐんだね」

「と、言うわけです。私が案内しますから・拓也さん・ミナモさん・準備はいいですか？」

そう聞いたモエ。

「ああ、いつでも出れるぜ」

「あの、ありがとうございました。私たち・・・」

「お礼はいいよ・・・元々最初はモエエから関わったわけだしね・・・何を探しているかは知らないが・・・終わったらまた戻っておいで・・・その時は集落の連中全員で歓迎するよ」

「はい！」

笑顔でそう返事するミナモ。

そして、モエ達は店の裏口から抜け道へと向かっていった。

「・・・何を探しているか知らない・・・訳はないんだけどね・・・占

い師というのは”見えてしまう”ものだからね・・・」

椅子に座るお婆さん。

「詳しくは見えなかったが・・・それを見つけるのは相当大変だよ・・・それに・・・もう一つの・・・」

そう呟くお婆さんなのであった。

第6話：魔女っ娘な炎使い（4）

モエの案内で抜け道へ向かっている拓也とミナモ。

「あの、モエさん・・・」

歩きながら話しかけるミナモ。

「どうしたんですか？ミナモさん」

「私たちに協力して・・・その・・・さっきの人達とかに知られたら・・・」

「・・・どうなるかは判りませんが・・・私なら大丈夫です」

そう告げたモエ。

「大丈夫って言われてもな・・・」

そう言う拓也。

「・・・つきましたよ・・・ここからが抜け道です」

「壁・・・ですね・・・」

「でも・・・えっと・・・」

なにやら壁を触っているモエ。

そして、何かのボタンを押すと扉が開き人が一人通れるくらいの扉が開いた。

「いやに機械的な仕掛けだな・・・」

「でも、ボタン操作は少し複雑ですから♪外の人が見つけてもすぐには通れません」

そう言うモエ。

「あの、色々ありがとうございました」

丁寧にお礼を言うミナモ。

「ううん・・・私こそあんなこととしてご免なさい・・・それでお詫びつて言うか何ていうか・・・拓也さん」

「ん？」

「・・・私も連れて行ってください！」

突然そう告げたモエ。

「連れてって・・・」

「ダメですよ・・・危険ですから・・・その本部の人達と関わることも・・・」

ミナモがそう言う

「それでも私・・・強くなるには・・・ずっとここにいってもダメなんです・・・だから・・・」

「・・・決意は固そうだな・・・」

「はい、お婆ちゃんも占いで私の行動・・・お見通しのはずですから・・・」

「拓也さん・・・でも・・・」

ミナモとしてはあまり関係のない人を巻き込みたくない気持ちがあった。

「ついてくる以上・・・甘えは許されないぜ」

「はい！」

強い心で返事をするモエ。

だが、そんな時

「こんな所に嫌がったのか・・・小娘！」

と、一人の男が拓也達の前に現れたのだった。

「あっ・・・」

声をあげるモエ。

「何だ・・・本部とやらの連中か？」

「誰だお前たちは・俺はその小娘に用があるんだよ・俺を不意打ちで倒しやがったそいつにな」

そうモエに告げる男なのであった。

「不意打ちで倒されたって・・・」

「モエさんに・あのやり方で倒されたんだ・・・」

そう思ってしまったミナモ。

「何でもいい・やり返さないことには気がすまないんだよ！」

そう言う男。

「って、事はお前能力者か？」

そう尋ねる拓也。

「おうよ・俺は【鉄】の能力者・・・ヴァン様だ」

そう名乗ったヴァン。

「拓也さん、ミナモさんどうしましょう・私普通に戦ったら勝てないです」

二人に助けを求めるモエ。

「・・・なあ、なら俺と戦わないか？」

そうヴァンに告げた拓也。

「お前とだと・・・お前も能力者か・・・」

「ああ・・・お前の鉄の力・・・どんなのか見てみたいしな」

そう言いながら刀を抜く拓也。

「いいだろう・・・一度戦い負けた相手を倒してもポイントは増えないから・・・新しい奴と戦い・・・勝つ・・・」

「ポイントって・・・何か役に立つのでしょうか・・・」

普通にそう思ってしまうミナモ。

「ヴァンだったっけ・・・そっちからでいいぜ」

「ガキのくせに・・・なら、遠慮なくいかせてもらおうぜ！」

気合をいれ攻めに向かうヴァンなのであった。

「何だ・・・お前武器出さないのか？」

拓也が尋ねると

「俺には武器を装備しておく必要はないんだよ・・・いつも現地調達だからな」

と、ヴァンは辺りを見渡すと落ちていた小枝を手を取った。

「俺の能力を見たいといっていたよな・・・」

ヴァンが力を込めるとその小枝は見る見るうちにその色を変えていった。

「はあっ！」

思い切りその小枝を投げるヴァン。

「!？」

祖父との修行で身についた戦闘での勘が拓也の身体を小枝の軌道からよけさせた。

その直後、その小枝は拓也の後ろの壁に突き刺さったのだった。

「小枝が・・・」

恐る恐るミナモが触ってみると、その小枝は完全な鉄となっていた。

「これが俺の能力・・・触れたものを鉄に変えられるんだ・・・多少決め事はあるがな」

「決め事？」

「人間や動物のような生き物には通じない・・・植物とかにはオツケーだな」

そう説明するヴァン。

「それと金属系も鉄には変えられない・・・お前のその刀もな」

「なるほどな・・・」

何やら感心している拓也。

「拓也さん・・・今ここで時間取られてると二人を探している人達が来ちゃいますよ」

そう言うモエ。

「・・・忘れてたな・・・」

そう呟く拓也。

「どうした・・・俺の能力を見せたんだ・・・次はお前の・・・」

そうヴァンが言った時

「お前たち、そこで何している！」

と、先ほどモエとお婆さんの家にやってきた男達が現れたのであった。

「まずいです拓也さん。あの人達が・・・」

そう言うミナモ。

「なっ、何だ？」

状況がわかっていないヴァン。

「悪いヴァン！俺達急いでるからな・・・勝負は全て終わってからつけようぜ」

そう告げた拓也。

「待てよ！俺はお前と・・・あの女に・・・」

「あの時はすみませんでした。謝っても許してもらえないかもしれないですけど・・・」

そう言うモエ。

「とにかく急ぎましょう」

ミナモはすぐに抜け道の中に入っていた。

「拓也さんも急いでください」

そう言いその後引き続き抜け道に入っていくモエ。

「本当に悪いな・・・ヴァン」

「お前のやる気がなくなったんじゃないからな・・・それに近づいてくる連中の様子じゃお前ら訳ありのようだしな」

「すまない・・・」

拓也が謝ると

「全て終わったら戻ってきやがれ・・あいつらは俺が止めておいてやるよ」

「って、そんな事したらお前が・・」

「その隠し通路・・見つかったらまずいんだろ？俺の事は心配するな・・お前と決着つけるまでくたばるつもりはねえよ」

そう言い放つヴァン。

「わかった・・ありがとな」

そう言い残し抜け道に入ると中から扉を閉める動作を起動させる拓也。

「暴れられなかった分・・あいつらで済ませるか」

そう言うヴァンは近づいてくる男達に向かっていたのであった。

第7話：流れゆく能力（1）

抜け道を進んでいる拓也・ミナモ・モエの三人。

「あの人・・・大丈夫なんでしょうか・・・」

少し心配しているミナモ。

「ヴァンも能力者だしな・・・それに俺と勝負をつけないといけないしな」

そう言う拓也。

「この抜け道を進むと街の外の通路と合流します・・・その先は私もよく判らないんですけど・・・」

そう告げるモエ。

「とりあえずは下の階層を目指していかないといけないんだろ・・・やっぱり地図がないと思いきって進めないな」

そう言う拓也。

「お婆ちゃんが言ってたんですけど特別な階層以外はそこまで複雑なつくりじゃないらしいので迷うことはないですよ」

そう言うモエ。

「じゃあ、張り切っていくか・・・仲間も増えたしな」

モエを見ながらそう言う拓也。

「足手まといにならないように頑張ります」

そう言い張り切るモエ。

そんな中、地下世界に存在する本部施設。

そこから二人の青年が外に出てこの階層の天井を見て何かを考えていたのであった。

「しかし、何で俺がわざわざ上の階層に行かないといけないんだよ」
なにやら呟いていた一人の青年。

「仕方ないでしょ・・・上からの命令なんだし・・・」

「ならお前だけ行けばいいだろ？ レイド・・・」

「上からの命令は僕とリュートの二人で行くように・・・って事だからね」

そう言うレイド。

「侵入者の調査で何で俺達本部の能力者が行かないといけないんだよ・・・」

そう言うリュート。

「そんなに嫌ならすぐに終わらせて戻ればいいだろ？一応連絡じやその侵入者・能力者かもしれないようだし」

そう告げたレイド。

「じゃあさっさと本部専用の通路から一気に上に行こうぜ」

そう言うのと歩き出すリユート。

「一応僕たち二人が一緒に選ばれたのは・能力の相性がいいからなんだけどね・・・」

歩きながらそう呟くレイドなのであった。

同じ頃、抜け道を進んでいた拓也たちは行き止まりにいた。

「モエ、もしかしてここが・・・」

「はい、この先が普通の通路です・・・と・・・」

壁の中からスイッチを見つけ押すとゆっくりと開く岩の扉。

「誰もいないみたいですわね・・・」

辺りを見ながら外に出るモエ。

「よし、下の階層目指して行こうか」

本部を目指し意気込む拓也なのであった。

「とは言ったものの・・・結局はただ適当に歩いているだけなんだよな・・・」

そう告げる拓也。

「本部って場所もどこにあるか判りませんし・・・」

そう言うミナモ。

「まあ、本部からの奴がひょっこり出てきてくれれば話は早いんだけどな」

拓也がそう言う

「出てきたらどうするんですか？」

モエがそう尋ねた。

「とりあえずは聞く・・・ダメだったら力づくでだな」

「あまり目立っちゃダメなんじゃ・・・」

そう呟くミナモ。

だが、そんな時二人の青年が拓也達の前に突然姿を現したのだった。

「ん？」

足を止める拓也。

「お前ら・・・あまり見ない顔だな・・・」

そう言うリユート。

「この人達・・・本部の人です・・・」

そう呟くモエ。

「わかるんですか？」

ミナモが聞くと

「あの服についているマークが・・・本部のマークです」

そう教えるモエなのであった。

「本部の奴なら丁度いいよな・・・聞いてみようぜ」

ミナモとモエにそう言う拓也。

「でも拓也さん・・・私達は勝手に地下世界に入ってきたんですから・・・本来は本部の人と関わるのは・・・」

そう言うミナモ。

「リユート！」

と、リユートの後ろにいたレイドがリユートの名を呼んだ。

「何だよ、レイド・・・」

「お前は報告の情報を覚えてないのか？この階層の入り口の一つで門番を倒した奴の情報・・・」

そう言うレイド。

「刀を使う男に一般人の女・・・こいつらがそうじゃないのか？」

「拓也さん、ミナモさん・・・やばいんじゃないですか・・・」

二人の後ろでそう呟くモエ。

「何だよ、その門番を倒したって話・・・」

何も知らない振りをしてそう言う拓也。

「とりあえず試してみればはっきりするだろ・・・」

リユートがそう言うのとリユートの周りに水の玉が出現し始めていたのだった

「この人も能力者・・・」

そう言うモエ。

「どんなものか見せてくれよ！」

そう言い放つと水の玉を拓也達に向けて放つリユートなのであった。

第7話：流れゆく能力（2）

「拓也さん！」

叫ぶミナモ。

「水の玉・・・」

そう呟く拓也。

「さあ、どうする・・・どうしてみせる」

そう言うリュート。

「俺がやるしかないだろ！」

思い切り刀を振り上げた拓也。

「二人とも下がってろ！」

拓也の言葉に対して素直に後方に下がるミナモとモエ。

そして、拓也が刀を振り下ろすと同時に刀にまとわれていた風が放たれリュートの水の玉を全て弾き飛ばしたのだった。

「風の・・・力か・・・」

そう言うレイド。

「初めて見る能力だな・・それに力も凄そうだ・・」

そう言いながら笑みを見せるリユート。

「拓也さん・・本部の能力者が本気になったら拓也さんでも・・」

そう言うモエ。

「わかってるさ・・さっきの水の玉が遊び程度の力だっていうことはな・・だけど・・」

リユート達を見る拓也。

「レイド・・手は出すなよ・・あいつと1対1で勝負したい」

「全く・・まあ、お前の實力なら問題ないだろうしな・・好きにやれ」

呆れつつそう言うレイドなのであった。

しばらくの間流れる静かな時間。

足音も立てれば響いてしまいそうな今の現状に、ミナモ達もその場から動けずにいた。

「！」

最初に動いたのは拓也だった。

「こいつは武器持っていないんだ・・いくらこいつの能力が凄くても・

・
」

そう言う拓也。

「確かに正論だな・武器を持っている方が有利だが・誰も持っていないなんて言っていないぜ」

そう告げるリユート。

「何だと・・・」

リユートが掌を上に向けるとそこに集まる水。

「見ての通り俺の能力は水・お前の風と違って目に見えるものを操る・だからこそ・こういう事も可能だ」

と、掌に集まった水は刀のような形に変化していった。

「水が・・・刀に・・・」

そう呟く拓也。

「本物の刀と違って中身は水だ・だけどな・能力の扱い次第で水は鋼以上の硬度を得ることも出来るんだぜ！」

そう言う拓也の刀をぶつかり合うリユート。

「何だよ・・・この感触・・・本当の刀みたいに・・・」

押され始める拓也。

「お前まだ能力を得てそんなに経ってないだろ・・・風の力が不安定だぜ」

そう言うリユート。

「何でそんな事がわかるんだよ」

拓也が聞くと

「能力者はな他の能力者に対して色々敏感になるんだよ」

そう言い放つリユートなのであった。

「こいつ・・・やっぱり強い・・・」

そう言う拓也。

「リユート・・・何時までやるんだ？一応俺達の目的は・・・」

「別にいいだろ・・・あいつらのこと確かめるのは何時でも出来るんだしよ」

そうレイドに言うリユート。

「ミナモ・・・モエ・・・二人とも先に行ってくれ」

「先につて・・・拓也さん！」

そう言うミナモ。

「今なら俺がこいつ等引き止めておける・・・ミナモには目的があるしな・・・少しでも目的に近づくために」

「・・・」

「ミナモさん・・・どうするんですか？」

尋ねるモエ。

「大丈夫・・・ですよね」

「ああ・・・爺ちゃんとの稽古とかで身体は丈夫だからな」

そう言う拓也。

「モエさん・・・拓也さんが動いたら一気にここを駆け抜けていきましよう」

「は、はい・・・」

小声で会話するミナモとモエ。

「じゃ、いくぜ！」

拓也の身体から吹き荒れる風。

「おう、どんどん来い！」

そう告げるリュート。

そして、それと同時に走り出すミナモとモエなのであった。

再びぶつかり合う拓也とリュート。

そして、この場を駆け抜けていくミナモとモエ。

「リュートの奴・・・あの風的能力者以外興味無しか・・・しかし俺も暇だからな・・・」

ミナモとモエが前を通っていくのを見た後、一瞬で二人の前に姿を現したレイド。

「えっ・・・」

足を止めるミナモとモエ。

「悪いけど・・・ここを通すわけにはいかないよ・・・まだお前たちが何者かわからないからな・・・」

と、二人に手をかざすレイド。

「ミナモさん、ここは私が・・・」

杖を構えるモエ。

だが、次の瞬間二人の身体には電撃が流れ二人はその場に座り込んでしまった。

「今の・・・」

「あの人・・・雷の・・・能力者・・・」

そう言うモエ。

「リユート・・・あまり遊んでないで終わらせろ・・・ここで倒しておけば調べる必要もないだろ」

「・・・拓也・・・だったな」

リユートが聞くと

「だったら何だよ・・・」

「俺はお前と本気で思い切り戦ってみたい・・・だからこんな所で倒すのはごめんだな」

「おい！リユート！」

レイドが大きな声を出すと

「こいつらの目的は知らないけどな・・・厄介なのは拓也だけみたいだしな・・・こいつらが何かしでかしたら俺が止めに行く・・・それでいいだろ？レイド」

「・・・お前が風の能力者に何を見たのかは知らないが・・・俺は関係ないからな・・・お前に付き合っただけで俺まで上から色々言われるのは面倒だからな」

そう言う拓也たちに背を向けるレイド。

「そう言うことだ・・次に会う時まで強くなってるよ・・そうすれば戦いが楽しめるからな」

そう言い残しリユートはレイドと共にこの場を立ち去るのであった。

第8話：強くなるために・・・（1）

リユートたちに見逃してもらった形となった拓也達。

一行は下の階層を目指すため道の先へと進んでいたのだが・・・。

「・・・」

無言で歩いている拓也とモエを見て自分も黙って歩くしかなくなっているミナモ。

「拓也さん・・・」

「何だ？モエ」

そう言う拓也。

「私・・・どうやったら強くなれるんでしょうか」

そう聞いてきたモエ。

「・・・俺も同じ思いなんだけどな・・・」

そう呟いた拓也。

「私拓也さん達の力になりたくてついてきたのに・・・結局あの本部の人に一撃で・・・」

そう言うモエ。

「それを言うなら・・・俺だってリュートが本気を出していたら勝てなかっただろうしな・・・」

「二人とも・・・」

後ろから二人の姿を眺めているミナモ。

「だったら・・・特訓です！」

いきなりそう告げたミナモ。

「特訓？」

後ろを振り返りながらそう言った拓也。

「リュートさんの発言・・・それが真実ならこちらが問題を起こさなければ接触しようとはしてこないはずです・・・だから今のうちに・・・」

「強くなるための特訓か・・・モエ・・・どうする？」

「強くなるためなら・・・私やります」

そう意気込むモエなのであった。

「とはいったものの・・・どう特訓するかな・・・」

そう言う拓也。

「私はここじゃ人前で天使の力は使えませんが戦いの役には立って
ないですね・・・聖天具を取り戻すまでは・・・」

そう言うミナモ。

「私は拓也さんみたいに強い攻撃は出来なくて・・・能力自体も不安
定だし・・・」

そう告げるモエ。

「この人数での個人特訓はちょっと難しいか・・・なら・・・モエ」

「はい、何ですか？」

そう聞くモエ

「モエの能力と俺の能力・・・二人の力を合わせればもっと強い攻撃
が出来るはずだ・・・だからその特訓をやってみようぜ」

そう提案する拓也。

「二人の力を合わせる・・・ですか・・・」

そう呟くモエ。

「拓也さんの風・・・モエさんの火・・・属性の相性としてはいい感じ
ですね・・・」

そう言うミナモ。

「じゃあと、りあえずやってみるか・・・と、モエってどんな火の能力使えるんだ？」

尋ねる拓也。

「えっと・・・普通に火の弾を放てるぐらいで・・・お婆ちゃんの所でも練習してたんですけど・・・上達できなくて・・・」

そう言うモエ。

「そうだな・・・一度やってみて色々変えていけばいいか・・・一度モエの能力見せてくれよ」

拓也がそう言うのとモエは杖を構えるのであった。

「で、では・・・いきます」

少し緊張しながらそう言うモエ。

「おう」

と、モエの持つ杖の先に集まる火の力。

「炎が玉の形に・・・」

そう呟くミナモ。

「私に火の能力・・・ファイヤーボールです！」

杖の先から放たれた火の玉。

しかし、その玉は小さくしばらく進んで壁にぶつかりと壁を少し焦がして消滅した。

「・・・あの・・・モエさん・・・」

どう声をかければいいのかよくわからないミナモ。

「私・・・やっぱりダメですよ・・・こんな能力じゃ・・・」

そう呟くモエ。

そして、拓也はとうとうさっきのを見て何かを考えていた。

「どうしたんですか？拓也さん」

尋ねるミナモ。

「いや、何とかなるかなってさ・・・」

「何とかなるって・・・でも、私の能力は・・・」

「ミナモも言ってただろ風と火は相性がいいって」

そう言うのと刀を抜く拓也。

「風の力でモエの火の力を増加させる・・・それが俺達のコンビネーション技だ」

そう告げる拓也なのであった。

「私の火を拓也さんの風で・・・」

そう告げるモエ。

「ああ、もう一度火の玉を頼むぜモエ」

「は、はい・・・」

もう一度杖を構え火の力を杖の先に集めるモエ。

「よし、放ってくれ」

「はい、ファイヤーボール！」

壁に向けて火の玉を放つモエ。

「そこに俺の風を・・・」

刀に風の力を集めていく拓也。

「行くぜ！」

モエの放った火の玉に風の力を放つ拓也。

しかし、風の力が強すぎたのかモエの火の玉を消してしまった。

「なっ・・・」

驚く拓也。

「多分ですけど・・・」

そう呟くミナモ。

「拓也さんの能力の方が強すぎてモエさんの火が消されちゃったんじゃない・・・」

「俺の力が・・・か・・・」

「やっぱり私の力・・・弱すぎて・・・」

そう言いうつむくモエ。

「わかった・・・そう言うことなら俺の能力を弱く放てばいいんだな・とりあえず成功するまでやってみようぜ」

そうモエに告げる拓也なのであった。

あれから十分後・・・。

「大丈夫ですか・・・二人とも・・・」

心配するミナモ。

「能力使いすぎかな・・・」

そう呟く拓也。

「疲れ・・・ちゃいました・・・」

かなり疲労している様子のモエ。

「少し休んだほうがいいですよ・・・連続であれだけ特訓したんですから」

そう言うミナモ。

「そうだな・・・」

その場に座り込む拓也。

それにつられるようにしてモエもその場に座った。

「悪かったな・・・俺のペースで特訓しちゃって」

そうモエに謝る拓也。

「いえ、大丈夫です。それに私のためにやってもらってますから」

そう言うモエ。

「そうですね・・・私も何かお手伝いできれば二人の負担も軽くなるんですけど・・・」

そう考えるミナモ。

と、そんな時

「何の音がしているのかと来てみれば・・・お前たちがそこの街で手

配されていた者達か・・・」

そう言って何人かの男達が拓也達の前に姿を現したのであった。

第8話：強くなるために・・・（2）

「何なんだ、こいつ等・・・」

そう言う拓也。

「さっきの街で私達を探していた人達の仲間じゃないですか・・・」

小声で話すミナモ。

「その刀をもった男とその女・・・まだ調査段階ではあるが・・・お前達を捕まえなければならぬ」

「・・・一応俺達が外からここに入った事はまだばれてないのか？」

そう感じる拓也。

「でも、捕まったらすぐにでも判っちゃいますよ・・・」

そう言うミナモ。

「拓也さん、ミナモさん・・・ここは私が・・・私なら地下世界の間人ですから・・・問題ありません。私があの人達を止めます・・・能力が弱くても・・・何とかしてみます」

そう言うモエ。

「でも、モエさん・・・」

と、ここで前に出る拓也。

「俺の風であいつら全部吹っ飛ばす・・・そしたらすぐにここから離れる」

そう言いながら刀を構える拓也。

「何をしようとも無駄だぞ・・・能力者」

そう言う男。

「やってみないとわからないだろ！」

刀に風の力を集め大きく振り風の力を放つ拓也。

と、男達はもっていた盾のようなものを構えた。

「!？」

そして、拓也の放った風はその盾によって封じられてしまったのであった。

「俺の風が・・・防がれた・・・」

驚いている拓也。

「驚いているようだな・・・この盾は能力者の放つ力を遮断する力を持っている・・・お前がどんな力を持っていたとしても全て遮断できる」

そう言う男。

「能力が通じないんじゃ・・・拓也さんもモエさんの能力も・・・」

そう言うミナモ。

「もうお前たちの能力は通じない・・・大人しくしてもらおう」

そう告げる男。

「能力が効かないなら・・・私が・・・」

ミナモが前に出ようとしたのを止める拓也。

「ここでお前が天使って事ばれたら余計にまずいだろ・・・」

「でも・・・これじゃここを突破するのは・・・」

そう言うミナモ。

「あの三人を捕らえろ！」

真ん中の男が言うのと周りの男達が拓也たちに向かっていった。

「拓也さんとミナモさんには・・・」

何とか止めようと努力するモエだが、あっさりと男の腕によって弾き飛ばされてしまった。

「モエ！」

叫ぶ拓也。

「まずは抵抗できないように動きを封じろ・・・反撃を受けては面倒だから・・・」

そう言う男。

「くっ・・・」

ミナモを守るため前に出る拓也。

「私・・・ついてきたのに・・・役に立ててない・・・何も・・・」

涙ぐみながらそう呟くモエ。

「こんなひ弱な奴は捕まえておかなくても平気だな・・・」

そう簡単に考えていた男。

「ミナモ・・・お前だけでも・・・」

「ダメですよ・・・モエさんもありますし・・・私だけ逃げるなんて・・・」

そして、二人を捕まえるために襲い掛かる男達。

「ダメーッ!!」

突如大きな声でそう叫んだモエ。

その瞬間、モエの身体から大量の炎が吹き出し始めたのであった。

「なっ・・・」

「モエさん!？」

驚く拓也とミナモ。

「拓也さんとミナモさんは・・・私が守るんです!」

モエの感情の爆発と共に炎も強く噴出していた。

「クッ・・・全員能力者対策用の盾を構えろ・・・少しでもまともにくらえば黒焦げになると思え」

そう仲間達に告げる男。

「アイツ・・・自分の意思で炎を出してるのか?」

尋ねる拓也。

「違います・・・この炎・・・モエさんコントロールできていません・・・このままだと私達も・・・」

ミナモがそう言う

「なら俺があいつら吹っ飛ばすついでに道を作る・・・炎がなくなったらモエを何とか落ち着かせてやるんだ」

「えっと・・・わかりました」

そう答えるミナモ。

「今ならモエの炎に気を取られてこっちの行動に対して防御できないだろうから・・・な！」

そう言い刀を振るい風の一撃を放つ拓也。

「なにっ・・・」

男達が気付いたときには風は目の前に迫ってきており、モエの炎と共に吹き飛ばされていった。

「ミナモ！」

「モエさん・・・」

モエの側によるミナモ。

「ミナモ・・・さん・・・」

ミナモの顔を見るモエ。

「もう、大丈夫ですよ・・・モエさんのおかげで流れが変わりましたから・・・」

「本当に・・・大丈夫なの？」

「はい！」

笑顔でミナモがそう言うと言いつくりとおさまっていくモエの炎。

そして、モエの身体から噴出していた炎は完全に消えたのであった。

「大丈夫か、モエ」

駆け寄る拓也。

「拓也さん・・・私・・・」

「俺達のことなら問題ないぜ・・・それよりあれだけ炎を放ってたのに身体は何ともないんだな・・・」

そう言う拓也。

「モエさんは火の能力者ですから・・・自分の身につけているものや自分自身は燃えませんよ」

そう説明するミナモ。

「和やかに話しているところすまないが・・・忘れていたのではないか？お前たちの立場を」

そう言う男。

「一回吹っ飛ばしたのに・・・立ち直ってきたか・・・」

「当たり前だ・・・お前の能力などまともに受けても傷一つついていない・・・」

そう言う男。

「拓也さん・・・もしかして・・・」

何かを感じるミナモ。

「モエ・・・あの技・・・やるぞ」

「えっ・・・でも、私じゃ・・・」

慌てて言うモエ。

「モエってあんだだけ凄い力持ってるんだ・・・自信もってやろうぜ」
そう言う拓也。

「・・・はい・・・やって・・・みます」

そう言い立ち上がるモエ。

「何をしようとも・・・この盾がある限り能力は通じない」

「なら、見せてやるぜ・・・俺達の力を合わせた技をな」

と、刀に風を宿す拓也。

そして、モエは拓也たちのために思いを込めて杖の先に火の力を集めるのであった。

「精神を集中させるんだモエ・・・お前ならやれる・・・自信を持つんだ」

そう告げる拓也。

「は、はい・・・」

次第にモエの持つ杖の先の炎のエネルギーが大きくなっていく。

「俺も力を調整して・・・モエの炎をより強く出来るように・・・」

そう考え刀に風を集めていく拓也。

「頑張って・・・二人とも・・・」

自分の力をおおやけでは使えないミナモはただ見守るしか出来なかった。

「さあ、来るならきてみろ」

そう告げる男達。

「放て！モエ！」

「行きます・・・私の中の炎の力を思い切り！」

男達に向けて火の玉を放つモエ。

「この一度だけでもいい・・・成功してくれ・・・渦巻け風よ！」

威力を調整し刀を振るい風を放つ拓也。

と、その風は渦のように回転しモエの火の玉を包んでいった。

その直後、絶妙な力の風の力を受け巨大化する火の玉。

「何だと・・・」

「あいつらを吹っ飛ばせ・・・俺とモエの力で！」

そして、その火の玉は男達の持つ盾とぶつかり合った。

「どんな攻撃でも能力によるものである以上・・・この盾で・・・」

と、攻撃の威力に押され始める男達。

そして、次の瞬間男達の持っていた盾にひびが入り砕けたのであった。

「馬鹿な・・・何故・・・盾が・・・奴らの攻撃は能力によるものだぞ」

そう言う男。

「二人の力の融合・・・本来はありえない強さの力が能力を防ぐ盾を・・・」

そう考えるミナモ。

「じゃ・・・今度は本気の一撃で・・・」

拓也は相手を傷つけずに吹き飛ばす強力な風で男達を弾き飛ばしたのであった。

第9話：動き出す者達（1）

追ってきた男達を撃破し、急いでこの場を離れる拓也たち。

「ここまで逃げれば大丈夫でしょうか」

そう言うミナモ。

「大丈夫か？モエ」

あの戦いで結構力を使ったモエを拓也は背負ってここまで逃げた。

「拓也さんだって能力使って疲れてるはずなのに・・・」

そう言うモエ。

「いって・・・とりあえず下の階への入り口を見つけないとな・・・
それか街に入らないとこんな通路みたいな所じゃすぐ見つかったま
う」

そう告げる拓也。

と、そんな時ミナモは通路の先に見える光を見つけた。

「光です・・・開けた場所に出るんでしょうか・・・」

そう言うミナモ。

「確かに微かに見えるな・・とりあえず行ってみるか・・下にいけるかどうかはわからないけどな」

そう言う訳でその光のほうへ目指して進み始める拓也達。

その頃、地下深くにある本部のほうでは・・。

「リユート・・本当にあいつらを放っておいていいのか？」

自室でくつろいでいるリユートにそう告げるレイド。

「あいつは強くなる・・そして、強くなったあいつを倒す・・完璧だろ」

そう言うリユート。

「だが、本部の能力者は沢山いる・・あいつ等が何か行動を起こせば誰かが現場に向かう・・お前が本気で戦う前に倒されるかもしれないな」

そう告げるレイド。

「その時はその時さ・・だけど、あいつの目・・他の連中とは違わず・・詳しい事は判らないけどな・・あいつはどんな困難も乗り越えてくる奴だ」

天井を見上げながらそう言うリユートなのであった。

光の方へと駆けていく拓也達。

そして、光の中へ飛び込んだ拓也達はその光景を見て驚くのであった。

「町だ・・・」

「第一階層での二つ目の町ですね」

そう言うミナモト。

「私が住んでた所以外にもこの階層に町があったんですね・・・」

その事に驚いているモエ。

「とりあえず町に入りたいんだけど・・・また、騒ぎになっちまうかな・・・」

その事を考える拓也。

「服装を変えてみましょうか？モエさんは大丈夫ですけど私達は地下の人達とは違う服装ですし・・・」

「そうだな・・・それで多少目立たなくなるなら・・・」

と、言うことで町での行動を起こす前に素早く服が売ってある店へと駆け込んだ三人。

「こう言うのはどうですか？」

ここではやはり地下で暮らしていたモエが活躍した。

町で生活していただけあって、街の人の服もよく見ているため二人に合い目立たない服をチョイスしていった。

「なるほどな・・・これなら目立たないし動きやすい服だ」

「少し可愛い服ですね・・・ありがとうございます、モエさん」

二人とも服が気に入った所で、モエが服の代金を店の人に払った。

「あのお婆さんから貰ってたのか？」

「はい、困らないようにって・・・」

「すみません・・・モエさんのお金・・・」

ミナモがそう言うのと

「大丈夫です・・・拓也さんもミナモさんも仲間ですから・・・仲間の為に使えるのなら」

そう言うモエ。

和やかな時間を過ごす拓也達だが、本部の方では新たな動きが始まっていたのであった。

「おい、リユート」

本部内の一室でリユートに声をかけるレイド。

「何だよ、レイド・・・また来たのか？」

そう言うリユート。

「お前な・・・この前の出撃の件・・・上に上手く伝えるのは大変だったんだぞ」

そう言うレイド。

「わかってるよ・・・で、今度は何なんだ？」

「・・・また上が指示を出してきた・・・俺達にじゃないけどな」

そう告げたレイド。

「他の連中か・・・」

ベッドに横になっていたリユートは、身体を起こした。

「別にあいつらの事を心配してるわけじゃないけどな・・・あいつを倒すのは俺だし」

「・・・お前だって知ってるだろう？本部の能力者の中には曲者もいるって」

「・・・何だ、レイドも結構あいつらのこと気にしてるんだな」

そう言うリユート。

「・・・気にしているか・・・」

と、リユートに背を向け部屋を出ようとしたレイド。

「どうしたんだ？」

「少し辺りを歩いてくる・・動いていないとなまってしまうからな」

それだけ言うのとレイドは部屋を出て行ったのであった。

本部でそんな動きがあっている頃・・・。

拓也たちは町の中でひっそりと行動していた。

「とりあえずゆっくり出来る場所だからな・・町は」

そう言う拓也。

「でも、こんな所で戦いになったら街のみんなに迷惑をかけてしまいますから・・出来る限り早く出た方がいいですよね・・」

そう考えるミナモ。

「そうだ、モエ・・頼みがあるんだけど」

「はい、何ですか？」

「この町で色々調べて欲しいんだ・・モエなら地下の人間だし怪しまれないだろう？」

拓也が頼むと

「わかりました・・私少しでも二人の役に立てるなら」

そう言うともエは足早に外へと出て行ったのだった。

「大丈夫でしょうか・・確かにモエさんは地下の人ですけど」

そう言うミナモ。

「でも、俺達がうろつくよりは問題ないと思う・・それに町中で戦いたくもないしな」

何も起きないことを願い、そう告げる拓也なのであった。

第9話：動き出す者達（2）

拓也たちが目立たないようにしている頃、情報を集めていたモエはというと・・・。

「何とか下の階層への道がわかりましたね・・・一応怪しまれないようにしてましたけど・・・大丈夫だったでしょうか・・・」

心配しつつも何とか役目を果たしたモエは、拓也たちの元に戻ろうとした。

と、急に方向転換し歩き出してしまったモエは後ろにいた一人の男にぶつかってしまった。

「はうっ・・・」

思わず地面に倒れるモエ。

「おっと、すまねえな・・・」

手を差し出してきた男。

「あっ、ありがとうございます」

男の手を借り起き上がるモエ。

「ん・・・君能力者だね・・・それじゃ一応聞いておくかな・・・この辺りで怪しい二人を見なかったかい？」

「怪しい二人ですか・・・」

モエはすぐに男が本部関係者だと気付いた。

「いえ・・・特には・・・」

うつむきながらそう答えるモエ。

「そう・・・けど君みたいな女の子に倒された能力者がいるって事だね・・・レベル1だし」

「えっ・・・どうして能力者のレベルを・・・」

と、モエが男の瞳を見たとき何か吸い込まれそうな感覚に陥っていた。

「能力者鑑定士・・・俺はその血を受け継いでいる者さ・・・まあ、俺自身も能力者なんだけどな」

そう言う男。

「ディオ様・・・そろそろ我々の目的のほうを・・・」

ディオと呼ばれる男についてきていた男達がそう告げた。

「そうだな・・・それじゃ・・・また機会があれば・・・」

そうモエに告げてディオと男達はその場から去っていったのであった。

モエはディオという男に会った後、すぐに拓也たちの待つ場所へと戻っていた。

「モエ、大丈夫だったか？」

「拓也さん・・ミナモさん・・実は・・」

話をするモエ。

「本部の能力者が？」

「はい・・拓也さんたちのこと探していました・・だから早くこの町から離れた方がいいと思います・・」

そう言うモエ。

「そうですね・・こっちの準備もオツケーですしすぐに出ましよう」

そう言うミナモ。

「はい・・」

だが、そんな時

「確かにね・・・でも、簡単にはこの町から出さないけどね・・」

「!?!」

突然声がして振り向く拓也たち。

と、そこには先程モエと会った能力者・ディオが立っていたのだった。

「お前・・・」

「また会ったな・・・と、成る程君が風の能力者か・・・確かにここじや見ない顔だな・・・そして、もう一人・・・」

拓也の隣にいるミナモを見るディオ。

「あっ・・・逃げてください！ミナモさん！その人の目を見たら・・・」

「!・・・」

「ミナモ!？」

突如として動かなくなったミナモ。

（何・・・この人の目を見たら・・・急に身体が・・・）

「俺は鑑定士としての力を受け継いでいるからなのか・・・目の力で相手が動けなくなったみたいない現象が起きるみたいだけど・・・まあ、それはおいといて・・・」

再びミナモを見るディオ。

「何故君が・・・天界の住人がここにいるんだい？」

突如としてそう告げたディオなのであった。

「お前・・・何言って・・・」

そう告げる拓也。

「わかるんだよ・・・この目なら・・・」

そう言うディオ。

「拓也さん、この人私のお婆ちゃんと同じなんです」

そう伝えるモエ。

「能力鑑定士・・・そう言えば・・・」

拓也はモエの祖母がミナモの目を見て天使であることを見抜いたことを思い出した。

「天使がいるといっても俺は女の子に手を出すつもりはないよ・・・あくまで俺の標的は君だ・・・風の能力者」

拓也を見ながらそう言うディオ。

「やるしかないみたいだな・・・」

「ああ・・・だけどここじゃ周りに被害が出て君も思いきりやれないだろ？場所を変えようか」

ディオがそう言う

「お前・・・ここ（地下世界）の本部とか言うところから来てる能力

者だろ？何で・・・」

「君はどの本部の能力者に会ったことあるのかはしらないけど・・・俺もあまり周りを壊す戦いは好きじゃないからね・・・でも、君を倒すためなら全力を出したい」

「拓也さん・・・」

「ミナモとモエはここにいろ・・・あいつは俺が」

そう告げ外に出る拓也。

「安心していいよ・・・俺の部下は帰らせた・・・君のいない間にあの天使を捕まえる事はしないよ」

「本部の連中をあっさり信用は出来ないけど・・・」

そんな訳で町から離れた場所にある空洞へと移動した拓也とディオ。

「それじゃ・・・始めようか」

そう言い構えるディオなのであった。

「お前・・・素手で戦うのか？」

そう聞く拓也。

「ああ、それが俺のバトルスタイルだからな」

そう言うディオ。

「じゃあ、遠慮なく行くぜ！」

刀に風を纏わせる拓也。

「成る程・・・能力はある程度使いこなしているみたいだな・・・」

と、ディオは自分の腕にエネルギーを集めていった。

「何だ・・・あいつの能力・・・」

「試してみればわかるさ・・・」

「なら・・・」

刀を大きく振り風の刃を放つ拓也。

と、ディオは手を前に出すとそのまま手で風の刃を受け止めたのだ
った。

「なっ・・・」

「研ぎ澄まされた風・・・確かに斬撃としては良い攻撃だ・・・でも、
俺には通じない」

するとディオはそのまま後方に風の刃を弾き飛ばした。

「そのエネルギー・・・相当強いのか・・・」

「それじゃ教えてあげるよ・・・俺の能力は【気】だ・・・気的能力者」

「気・・」

よくわからない拓也。

「オーラと言えばわかりやすいか・・君の風と同じで本来は見えない力だけど・・こうして力を集中させれば誰にでも見える」

そう説明するディオ。

「そして、集中され圧縮された気の力は攻撃にも防御にも有効となる」

そう告げるディオなのであった。

第9話：動き出す者達（3）

「オーラ・・・」

「まあ、どんな自然系能力でも攻撃だけじゃなく防御に使うことは出来る・・・ただし防御の方は色々コントロールしないといけないけど・・・」

そう言いながら拓也に向けて手をかざすディオ。

「悪いけどあまり時間をかけるのも本部に悪いから・・・抵抗しなければ君も無事でいられる・・・」

「だけど、本部って所に連れて行かれて・・・その後どうなるか判らないんだろ？」

そう聞く拓也。

「そこから先は上の人の判断だからね・・・それじゃ・・・」

腕に気の力を集めていくディオ。

「ミナモ・・・モエ・・・お前たちだけでも無事でいられるなら・・・」

だが、その時

『悪いが・・・そいつをお前に渡すわけにはいかない』

突然何処からかそんな声が聞こえた。

「!？」

驚く拓也とディオ。

「雷柱陣」

と、ディオの足元からディオを囲むように四本の雷の柱が出現した。

「こいつは・・・」

とっさに腕を引っ込めたディオ。

「雷・・・まさか・・・」

そして、二人の前に姿を見せたのは雷の能力者・レイドなのであった。

「お前・・・リユートと一緒にいた・・・」

「レイドだ・・・」

そう告げたレイド。

「レイド！お前、何しに・・・いや、それよりも何で仲間に向かって技使ってるんだよ」

そう叫んだディオ。

「その理由は簡単だ・・・この風の能力者は・・・リユートの戦いたい

相手だからな」

「リユートが戦いたいとか関係ないだろ！大体この能力者は本部にとって・・・」

ディオがそう言う

「だがそれでも俺はリユートのために動くよあの時から決めている・・・」

そう言いディオから拓也の方に視線を戻した。

「お前・・・」

「風の能力者・・・一つだけ言っておく。俺はお前を助けに来たわけじゃない・・・リユートと戦う前にお前の力を見ておきたい」

そう告げると手のひらに雷の力を生み出すレイド。

「・・・どちらにしても本部のやつと戦うことになるのか・・・」

そう言い刀を構える拓也。

「結局戦いに来たのなら邪魔をする必要ないだろうが・・・どうせお前もそいつを・・・」

「行くぞ！」

両方の手のひらに雷の力を集めたまま拓也に向かっていくレイドなのであった。

（レイドの雷・・・少しでも受けたらやばいだろ・・・）

そう考えレイドとの距離をとろうとする拓也。

「確かにいい考えだな・・・リユートの水と違って俺の雷は触れれば大ダメージは免れない・・・だが・・・」

と、移動しながら手を拓也の方に向けたレイド。

「!？」

レイドの行動に気付く拓也。

「雷閃！」

レイドの手に平に集められていた雷が閃光状となり拓也に向かっていった。

「っ！」

とっさに刀に集めた風を雷閃に向けて放った拓也。

そして、風の一撃とぶつかった雷閃は軌道が反れ拓也への直撃はまぬがれた。

「今、雷を・・・」

「よくあの瞬間で反応したな・・・さすがリユートが認めている能力者だな・・・」

そう告げたレイド。

「あいつ・・・こっちが少しでも隙を見せたらやられるな・・・」

そう言う拓也。

「・・・お前の力は一応見れた・・・後はリユートに任せる・・・」

そう告げたレイド。

「待てよレイド！それじゃ本部は納得しないだろうが！お前、本部のナンバー3を敵に回すつもりか」

そう言うディオ。

「リユートのためなら・・・俺が全ての罪を受けることぐらい・・・」

「あいつ・・・」

と、レイドはディオの周りの雷の柱を解除した。

「・・・」

無言のディオ。

「今回は見逃してやる風的能力者・・・いや、拓也。だけどなまとも
に戦ったらお前が負けていたんだからな・・・それを覚えておけよ」

そう言うのと去っていくディオ。

「拓也・・必ずリュートの元までたどり着け・・本部の能力者として
は言っ
てはいけないことだがな・・」

そう言い残しレイドもこの場から去っていくのであった。

第10話：螺旋階段の戦い（1）

本部の能力者、ディオ・レイドとの戦いを乗り切った拓也。

だが、何か釈然としないものが心の中にあった。

しかし、ここで立ち止まっても仕方がないので街に戻りミナモ・モエと合流する拓也。

「拓也さん！」

拓也の無事な姿を見て喜ぶミナモとモエ。

拓也も二人が無事なのを確認してとりあえずほっとしていた。

「拓也さん、大丈夫だったんですか」

そう聞くミナモ。

「ああ、色々あったけどな・・・とりあえずすぐに下の階層へ向かうぜ・・・こんなに本部の能力者が動いていたら危ないからな」

そんな訳ですぐさま街を出る拓也たち。

「何だか慌ててますね拓也さん・・・」

そう感じたモエ。

「でも、本部の人と何度かこの階層で出会ってますから急いでこの

階層を出たい気持ちはわかりますよ」

そう言うミナモ。

（それだけじゃないんだけどな・・ディオがあのままでは限らないし・・あそこでの状況を知って他のやつが来ないって保証はないしな）

そんな事を考えながら先を急ぐ拓也。

しばらく通路を進んでいくと先にかなり広い場所を見つけた拓也たち。

「何だ・・街でもないのに・・広い空間だな・・」

そう言う拓也。

「あつ、ここですよ。下の階層にいける場所」

突然そう告げたモエなのであった。

「何だ・・階段？」

広いフロアにあったのは下の階層に続いていると思われる螺旋状の階段だった。

「こんなに目立ってたんですね・・下の階層に行ける場所って」

そう言うミナモ。

「でも、お婆ちゃんが言ってたんですけど・・・逆に危ないらしいですよ」

そう言うモエ。

「確かに・・・これだけ広く大きな階段だし・・・周りには隠れる場所もない・・・すぐ見つかるだろうな」

そう考える拓也。

「でも、ここしか階層移動は出来ませんよ・・・」

そう告げるモエ。

と、辺りをしっかりと見渡す拓也。

「とりあえず周りにはそんなに人はいない・・・ただの通行人っぽいし」

そう言う拓也。

「モエさん、地下世界の人ってここ普通に通れるんですか？」

尋ねるミナモ。

「お婆ちゃんが言うには見張りの人はいるみたいで・・・怪しくなければ通れるみたいですよ」

「って、俺たちじゃまず止められそうだな・・・」

「拓也さん、どうしましょう」

そう言うミナモ。

「・・・ミナモ・・・今の力でモエを抱えて飛べるか？」

「えっ、多分・・・モエさんの身体の大きさなら何とか飛べるかもしれませんけど・・・」

そう答えるミナモ。

「なら、この作戦で行こう」

と、拓也は自分が考えた作戦をミナモとモエに話すのであった。

「!？」

拓也から説明を受けたミナモは驚いていた。

「そんな事・・・拓也さんが危険・・・」

「ああ、それにミナモ達の方も安全じゃない・・・本当はもっと何か良い方法を考えたいんだけど・・・」

そう言う拓也。

「拓也さん・・・」

そう呟くモエ。

「わかりました・・私必ずモエさんを守って下の階層まで辿り着きます」

そう言うミナモ。

「すまないな・・」

そう告げると真剣な表情になる拓也。

「拓也さん・・何か考えがあるんですか？」

尋ねるモエ。

「一応な・・上手くいけばだけど・・それとミナモ達にはなるべく俺より先に進んでいてくれ・・巻き込まれたら大変だからな」

「はい！」

そして、準備をするミナモとモエ。

「しっかりつかまっていてくださいね・・私も本来の力が出せないのであれですけど・・」

と、小さな天使の翼を出現させるミナモ。

「それいつまで出せるんだ？」

「時間制限はありませんけど・・この状況だと敵の攻撃を受けたら消えてしまうかもしれません」

そう告げるミナモ。

「わかった、攻撃は俺が止める・・・それじゃ作戦スタートだ」

そう言い行動を開始する拓也たちなのであった。

「まずは私たちから・・・モエさん・・・」

「はいっ、大丈夫です」

そう答えるモエ。

「それじゃ拓也さん・・・」

「ああ・・・」

そして、モエと共に地下第二階層へと続く螺旋階段内へと突入するミナモ。

「次は俺だ！」

それとほぼ同時に螺旋階段内へと飛び出した拓也は思い切り辺りに風の力を放った。

「何だ！あの男は！」

螺旋階段を警備していた本部の男達が拓也の存在に気づいた。

そして、拓也が相手を引き付けている間に螺旋階段中央の空洞部分を降りていくミナモとモエ。

「あの、ミナモさん・・・これって・・・飛んでるって言うより・・・落ちてませんか？」

そう聞いてきたモエ。

「確かに急降下しているだけですけど・・・スピードを落とすのは下の階層に近付いてからじゃないと・・・」

そう考えるミナモ。

そして、上では拓也が引き付けるのと自身がここを突破するために奮闘していた。

「なぎ払え！」

刀を振り風の力で男たちを吹き飛ばしていく拓也。

「能力者が出てきたら厄介だからな・・・ミナモ達が上手く下に到着したら俺も早く行かないとな・・・」

下へと向かいながら本部の男達と戦っていく拓也なのであった。

第10話：螺旋階段の戦い（2）

拓也が上で奮闘している頃、ミナモとモエは地下第二階層の近くまで降りてきていた。

「そろそろ第二階層の大地が見えてきます…」

ほぼ急降下状態のミナモ達。

敵に気をつけながら小さな翼を羽ばたかせてブレーキをかけていくミナモ。

「モエさん、小さな炎を一発…撃てますか？」

「は、はい。やってみます」

ミナモにしがみついている状態ながらも、持っている杖を上階へ向けて炎の能力を発動させ小さな火の玉を放ったモエ。

そして、上にいた拓也はそのわずかな炎を確認した。

「到着したのか…なら、俺も」

風を思い切り放ち敵を退けて一気に階段を駆け下りていく拓也。

と、階段の下から現れた新手の男達。

「あいつらの持っている盾…あの時の能力を防ぐ盾か」

思い出しながらそう告げる拓也。

「これ以上進ませはしないぞ」

下から迫ってくる男達。

「今はモエがないからあの時みたいにあの盾の防御力を上回る能力攻撃は出来ない。そして、俺一人の能力じゃあの盾は壊せない…でも、能力じゃない攻撃方法なら」

何とか方法を考える拓也。

「これしかないな…」

刀を横に構え風の力を蓄える拓也。

「風の能力と鳳流の力、今こそ本気の一撃！」

一瞬の間の後拓也は思い切り刀を振った。

「風之鳳流・旋疾一閃！！」

拓也の刀から放たれた強力な斬撃はこの通路の壁にぶつかり周囲に瓦礫の雨を降らせた。

「なっ、何」

驚く男達。

「ミナモの真似じゃないけど…俺もこうやって行くしかないみたい

だな」

そう考えた拓也は螺旋階段の空洞部分である中央に飛び込んでいった。

「しまった、奴が…」

瓦礫の雨をかわしながら拓也を見ている男達。

「風が…」

多少強引ながら地下第二階層に無事到着したミナモとモエ。

そして、モエが何やら風を感じていた。

「拓也さんの…風」

上を見てそう呟くモエ。

「拓也さんが…落ちてきてます」

「落ちて…?」

天使だからなのか視力が良く、モエが確認できない拓也の姿を確認していたミナモ。

「風のコントロール、上手くやらないとヤバイな…」

そう考えながら刀を構える拓也。

修行での祖父の教えを思い出しながら真下に刀を振るう拓也。

「吹き付ける風！疾流閃」

刀から真下に向かって強い風が流れていき、落ちていく拓也の落下スピードを緩めていった。

「…っ」

回りに気付かれないように隠れていたミナモとモエは、突然吹き付けてきた風に驚いていた。

「確かに風の力なら高い所から落ちてもコントロール次第で上手く着地できますね」

そう言うミナモ。

そして、ミナモとモエが見守る中拓也は第二階層に降り立つことが出来たのであった。

第11話..磁力と鉄

無事地下第二階層へとやってきた拓也達。

だが、現在は見つからないように隠れていた。

「結構螺旋階段で暴れたからな…とはいえずっところやって隠れているわけにもいかないしな…」

そう言う拓也。

「ミナモさんも拓也さんも大丈夫ですか？」

心配するモエ。

「私は大丈夫ですけど、拓也さんの方が能力を使っていますから…」

そう言うミナモ。

「俺なら問題ないよ。それより何とかこの階層の街に入れればいいけどな」

そう思う拓也。

上の階での騒ぎが原因で、第二階層も拓也達を探す男達でにぎやかになっていた。

「さすがに連続であれだけの数と戦うのは無理があるな」

様子を見ながらそう言う拓也。

「拓也さん、私が空を飛んで街を探してきましたようか？このままここにいてもいつかは見つかってしまいますし」

そう考えたミナモ。

「そうだな…幸い第二階層は天井も高く作られてるしな、頼めるかミナモ」

「はい♪頑張ってきます」

そう意気込み男達に見つからないように高く飛んでいった。

「本当に大丈夫でしょうか…第二階層にも本部の能力者がいる可能性もありますよ」

ミナモを見送りながらそう言うモエ。

「仕方ないさ。こうなる事はある程度予想できてたしな…」

とりあえずミナモが戻ってくるまで、じっとしている拓也。

それからしばらくして男達の数もだいぶ減り、更にその後ミナモが高いところから降りてきた。

「お帰りなさい、ミナモさん」

そう言うモエ。

「拓也さん、街なんですけど。あるにはあったんですが」

そう報告するミナモだったが、何やら元気がなさそうだった。

「何かあったのか？」

尋ねる拓也。

「この近くの街：特殊な構造になってこの第二階層の中で高い場所に造られてるんです」

「どういうことなんだ？」

「外からの進入とかを防ぐためらしいんですけど：階層の移動と同じようにあの街に入るには決められた所からしか通常は入れないみたいです」

「通常はってことは…」

拓也がそう言う

「はい、私が抱えて飛んでいけば一人ずつですけど入る事は出来ますよ」

そう答えたミナモ。

「それしかないみたいだな：ここから天井ギリギリを進んでいけば地下の連中に見つからずに街に入れるか？」

「着地場所をちゃんと選んで降りれば大丈夫です」

「わかった、それじゃモエ」

「はい？」

いきなり声をかけられて驚くモエ。

「先にミナモと一緒に行ってくれ」

「それなら拓也さんが先に」

モエがそう言う

「ここがずっと安全だって言う保障はないからな。俺が残っていた方がいい」

そう告げた拓也。

「すみません、拓也さん」

「それじゃ行ってきますね」

そう言うミナモはモエを抱えて再び高く飛んでいくのだった。

そんな頃、ミナモが見つけた第二階層の街では…。

「お前の…ような奴がこの街に居座ってやがるのかよ」

そう告げる一人の男。

「【鉄】のヴァンか……。中々の能力だったが、所詮本部に登録されていない能力者。俺の能力の前には意味がなかったな」

そう言うもう一人の男。

「本部の能力者：【磁力】の能力者・シルヴァ：」

「許可もなくこの街を経由して第三階層に降りる事は出来ない……。いくらお前がこの地下世界の住人であってもだ」

そう言い放つシルヴァ。

「だが、おかしな奴だな……。お前を倒せば本部の事情関係ないしにそこを通すって言うしよ」

「俺の一つの信念だ。俺は本部の能力者で本部の指示を受けてこの街にいる。だが、ここを負かされた以上ここでのやり方は俺が決める」

そう言うシルヴァ。

「ちっ、厄介な奴だな」

そう呟きながらヴァンは一時退却していくのだった。

第12話：共同戦線（1）

モエを次の街に運んだミナモはすぐに拓也の下に戻ってきた。

「それじゃ行きましょう、拓也さん」

そう告げるミナモ。

そして、移動する拓也達。

眼下で自分達を探してる男達を見て何かを思う拓也。

そして、無事拓也も次の街へ入る事が出来たのだった。

「地下世界でも色んな街があるんだな…と」

すぐにモエと合流する拓也・ミナモ。

「さてと、街に入っただのはいいけれど…次に進むにはどうするんだ？ここを通るしか先へ進めないんだろ」

そう聞く拓也。

「はい、さっき入ってきた方角の反対側にいけばまた飛んで降りてもいいですし」

そう答えるミナモ。

「まあ、とりあえず街で色々調べてみようぜ」

そう言う拓也。

そんな訳で拓也達は街の中に入り情報を集めることにした。

「磁力の能力者ですか？」

街の人からそんな話を聞いた拓也達。

「ああ、そうだ。この街の二つある出入り次の中で、奥の道に進む方の出入り口に拠点を構えて住んでるんだ」

「どういう人なんですか？」

尋ねるミナモ。

「門番みたいなものだよ。怪しい奴の出入りを止める役。まあ、実力はあるから街の人は頼りにしているんだけどね」

そう言う街の人。

そんな情報を得た拓也達は、宿屋にて次の行動について話し合う事にした。

「まさか能力者が出入り口を守ってるなんてな…」

そう言う拓也。

「飛んでいこうにも出入り口近くにそんな人がいるなんて」

「どうしましょう、拓也さん」

尋ねるモエ。

「本部の能力者なら話をして通してもらって訳にはいかないよな」

そう言う拓也。

「何かこの街でいい方法が見つかりたいんですけど」

そう考えるミナモ。

「拓也さん、前みたいに拓也さんとのコンビ攻撃じゃダメなんですよか」

そう言うモエ。

「まだその磁力の能力者とは戦ってないからそれがいい手なのかどうかはわからないけど…今の所それしかないな」

「とにかく一度行ってみましょう。あまりこの街にすぎるのも本部に居場所がばれた時逃げ場がなくなっちゃいます」

そう告げるミナモ。

「よし、行こう」

そう決め行動を開始しようとした拓也達。

だが、その時目の前にあの男が現れたのだった。

「!？」

「お前は…」

驚くその男と拓也。

「ヴァン！」

かつて地下第一階層にて拓也と戦ったヴァン。

「あの時はお前達は何やら大変な目にあってたから勝負は途中で終わってたな」

そう言うヴァン。

「あの、ヴァンさん…」

そう呟くミナモ。

「ちょっと話は聞かせてもらったぜ…本当はお前と再戦したいけどな…俺もこの街を出たいと思っていたところだ…ここは一つ協力しないか？」

突然そんな話を持ち出してきたヴァン。

「俺は構わないが…」

「色々俺に聞きたい事もあるんだろ？俺は一度磁力の能力者とも戦ってるしな…勝負を挑むなら明日にしようぜ」

そう告げたヴァンなのであった。

第12話：共同戦線（2）

「一応地下にも時間はあるんだな…」

「まあな、時間的に夜になると街はもとより地下世界全体が危険な舞台になるからな」

そう言うヴァン。

「ヴァンさん…」

と、少し離れた場所から声をかけるモエ。

「そっか、モエってヴァンを…」

思い出す拓也。

「確かにあの時はやり返したかったけどよ…今はどうでもいい。どちらかというとな拓也の方と戦いたいしな」

そう告げるヴァン。

「今回の件が片付いたらやってやるよ」

そう言う拓也。

「それでは…まずは磁力の能力者の話を聞かせてください。ヴァンさん」

そう言うミナモ。

「シルヴァの事だな…まあ、相性って言うのもあるけどな…つまり鉄などを自在に操れるんだ。自分の磁力でな」

そう話すヴァン。

「確かに鉄の能力のヴァンさんでは勝てないわけですね」

そう言うミナモ。

「それだけじゃない…戦いやすくするために辺りには鉄の武器などが色々設置してあるんだよ。数人でかかっても勝てるかどうかかわからないぜ」

そう告げるヴァン。

「それよりさ、何でヴァンも第二階層にいるんだ？それもこの街に入ってきてるし」

そう聞く拓也。

「上階での騒ぎの後捕まっちゃってな。何故かそのまま下…つまり地下第二階層に連れて行かれたんだよ」

「そうだったんですか…」

そう言うミナモ。

「お前達より先にこここの階層に来て街に入ったって訳だ。第二階層

の奥へ進むほうはシルヴァが守っているから出る事は出来ないがな」
そう告げるヴァン。

「奥に行くにはシルヴァって奴を倒さないとな…とはいえ相手は本部の能力者だろ…下手にこっちの目的がばれたら」

それを心配する拓也。

「それは大丈夫だと思うぜ。あいつは確かに本部の能力者だけど、本部に出入りはしてないし連絡等もしないぜほぼ個人でずっとこの第二階層にいるからな」

そう言うヴァン。

「もしもの時はミナモ、頼めるか。出来る限り俺とヴァンとモエで何とかしてみる」

「は、はい。わかりました」

了承するミナモ。

「それじゃゆっくりやすもうぜ。シルヴァを倒すにはこっちも万全の状態じゃないといけないからな」

そう言うヴァン。

「そうだな…」

そんな訳で拓也達四人は、明日に備え今日は眠りにつくことにした

のであった。

そして…。

第13話：磁力の戦士・VSシルヴァ（1）

翌日。

だいぶ地下での生活が慣れたからなのか、気持ちよく目を覚ます拓也。

「それはそれであれだな…」

そんな事を考えながら外に出る拓也。

「今日も戦いだな…」

そう言う拓也。

「よく眠れましたか？」

と、後ろから声をかけてきたミナモ。

「一応な…モエとヴァンは？」

「モエさんはまだ寝てますけど、ヴァンさんはすでに準備を始めてます」

「そっか…まあ、元々ヴァンが戦い挑んでたんだからな…とはいえ俺達も通らなきゃならない場所だ…なら、一緒につてな」

そう言う拓也。

「よう、お前達も朝から早いな」

そう言いながら姿を見せるヴァン。

「お前こそ…今日が勝負だからな」

「ああ、俺にとってもお前にとってもな…さっき炎少女も起きてきたぜ…じゃあ朝食にしようぜ」

戦いの前のちよつとしたゆっくりできる時間。

拓也達はじつくりとその時間を楽しんだ。

「よし、そろそろ行こうぜ…準備はいいな？」

拓也達に尋ねるヴァン。

「ああ、問題ないぜ」

「私も頑張ります」

そう言う拓也とモエ。

そして、ヴァンの案内の元シルヴァの待ち受けるこの街の下階層へ行ける方の出入り口へと向かった四人。

「来訪者か…と、またお前か…ヴァン…」

「ああ、だが今回はこの前とは違うぜ」

と、シルヴァはヴァンの隣にいる他のメンバーを見た。

「…お前が連れてくるという事はこいつらは能力者か？」

「まあな、一人を除いてだがな」

そう言うヴァン。

「何人能力者を連れてこようとも…本部関係者ではない者を通す訳にはいかない」

と、シルヴァの周りに鉄の刃が浮遊していた。

「金属が…」

「あれがシルヴァの能力【磁力】だぜ」

そう告げるヴァン。

「ヴァンから私の能力を知らされているようだが、その知識だけで私に勝つ事が出来るか？」

そう言うシルヴァ。

「知ってても知らなくても…やるしかないからな」

そう告げると拓也は木刀を構えた。

「拓也さん…いつもの刀じゃなくて大丈夫でしょうか…」

心配するミナモ。

「まあ、仕方ないだろ…あの刀じゃあいつの磁力の餌食だからな」

そう言うヴァン。

「私だって…」

杖を構えるモエ。

そして、シルヴァVS拓也・モエ・ヴァンの戦いが始まっていくのであった。

第13話：磁力の戦士・VSシルヴァ（2）

「とはいえお前達の方：ヴァンは使い物にならないのではないのか？ヴァンの能力：お前達も理解しているはずだ」

そう告げるシルヴァ。

「そんなことはわかってるさ。でも、これは一応ヴァンの戦いだからな・・・俺達はどうだ」

そう言う拓也。

「なるほどな・・・では、行くぞ！」

と、宙に浮いていた鉄の刃がゆっくりと空中を移動し始めた。

「モエ、気をつけろよ」

「はい・・・」

緊張した空気が流れる中、鉄の刃から視線をはずさないようにする拓也とモエ。

「拓也！そっちは任せたぜ！」

突然そう言うヴァンは、シルヴァに向かって駆け出していった。

「それがどうした・・・私の磁力で鉄の刃は自在に操れる」

と、ヴァンに向けて宙の刃を放つシルヴァ。

「させるかよ！」

木刀に風を込め思い切り辺りに風を吹かせる拓也。

すると、ヴァンに向かっていった鉄の刃の軌道がそれていった。

「風の力で軌道を変えたか・・・だが、その程度の風では私の磁力の力は止められない」

と、鉄の刃は軌道修正し再びヴァンへ向かっていった。

「止めきれない・・・」

「だったら・・・！」

小さな火の玉であるがそれを数発シルヴァに放つモエ。

「・・・」

と、軽く手を動かしヴァンに放っていた刃の軌道を変え火の玉を碎いた。

「お前こそ今まで以上に俺に対してぬるい攻撃だな…この程度の数ならこの身に受けても何の問題もないぜ！」

鉄の刃の攻撃を背中に受けながらも拳をシルヴァに放つヴァン。

「お前こそな・・・私の武器がその程度の刃だけだと思ったのか？」

すると突然鉄の板が飛んできて自分とヴァンの間に落下した。

「グッ……」

鉄の板に拳を打ちつけ逆にダメージを受けるヴァン。

「あの板……普通じゃ持てないだろ……さっきの……磁力で動かしてるのかよ……あんなのを」

そう言う拓也。

「そう……これが磁力の力だ」

そう告げるシルヴァ。

「拓也さん……」

拓也の側に寄り話をするモエ。

「金属なら炎で突き破れるはずです……拓也さんの風で炎の威力を上げれば……」

「……そうだな……まずはあの鉄板の防御を突き破らないとな」

そう言い木刀を構える拓也。

「下がってるんだ！ヴァン」

そう言うと同時に拓也とモエは自分の能力を発動させた。

「ほう・・・」

「受けてみな！」

そして、風と炎の融合攻撃をシルヴァに向けて放つ拓也とモエ。

「能力の融合か・・・面白いな・・・ならば受けてみよう」

と、鉄の板を立て拓也達の攻撃を正面で受けるシルヴァ。

「考えやがったな拓也の奴・・・威力の弱いあの炎娘の能力でも拓也の能力で・・・」

しかし、そんな拓也達の攻撃もシルヴァの操る鉄板を貫く事は出来ずそのまま攻撃は消滅してしまった。

「嘘だろ・・・」

「その攻撃が君達の最大の攻撃だったみたいだね：すなわちこれ以上私に勝つ為の方法は残っていない」

そう告げるシルヴァ。

だが、そんな時最後方にいたミナモは何かを決意したような表情を見せたのであった。

第13話：磁力の戦士・VSシルヴァ（3）

「さて、どうするかな・・・俺とモエの連携攻撃でもダメなら・・・」

そう告げる拓也。

「拓也さん・・・」

と、後ろから静かに声をかけたミナモ。

「ミナモ・・・どうし・・・」

拓也がそう言うのと真剣な表情を見せていたミナモ。

「ミナモさん・・・」

モエもミナモの表情に驚きながらそう呟いた。

「私、覚悟は決めました。私も今ここで戦います」

そう告げたミナモ。

「でも、ミナモ。お前の正体をこの奴らには・・・」

そう言う拓也。

「わかっていますよ、拓也さん。でも、ここを突破するには私も参戦しないといけないみたいですから」

そう告げるミナモ。

「・・・」

と、じつと様子を伺っているシルヴァ。

「でも、どうやるんですか？」

尋ねるモエ。

「私の武器は・・・今はこれだけですけど・・・」

と、ミナモの手に出現する光の弓矢。

「地下世界に突入した時に使ってた弓矢・・・でも、確かそれって物理的破壊力は無かったんじゃない？」

そう言う拓也。

「あの時は・・・そうでしたけど・・・私が今使える自分の力を全て注げば物理破壊力を矢に持たせることも出来ます・・・人相手には使いたくありませんが・・・相手の防御を破るぐらいなら」

そう告げるミナモ。

「あれさえ壊してくれるなら後は俺の力で道を開いてやるぜ」

「で、どうやる？」

尋ねる拓也。

「モエさん、貴方の炎の力を貸してください。鉄の防御を破るにはモエさんの炎が必要です」

そう言うミナモ。

「なら、突入役は俺も参加だな。ヴァン！」

「まあ、俺の足は引っ張るなよ。拓也！」

「ようやく来るか・・・新たな攻撃をしようともこの防御は破れはしない」

そう告げるシルヴァ。

「後は頼んだぜ！ミナモ、モエ！」

そして、シルヴァに向かっていく拓也とヴァン。

そして、ミナモは弓矢を構えると

「モエさん、貴方の炎の力を直接この矢に・・・」

「はっ、はい！」

杖を構え炎の魔力を高めると、ミナモの矢に杖の先端を触れさせた。

「!？」

その瞬間、足元がふらつき始めるモエ。

「急に力が・・・吸い取られていく感じ・・・」

「すみません・・・でも、これで放てます」

と、ミナモの光の矢は赤く輝いていた。

（あの力・・・能力じゃないな・・・しかし・・・今は・・・）

シルヴァは接近してくる拓也とヴァンを見た。

「鉄板の防御をしたまま鉄の刃で二人を落とす」

そう考えたシルヴァは、鉄の刃を操作して拓也とヴァンに放つのであった。

第13話：磁力の戦士・VSシルヴァ（4）

「ヴァン！」

「わかってるぜ。こうなったらこっちは手数で勝負ってな・・・」

と、ヴァンはポケットからたくさんの小さな棒を取り出すとそれを全て鉄に変えた。

「何のつもりだ・・・ヴァン」

そう告げるシルヴァ。

「こういうつもりだよ！」

と、思い切りシルヴァの頭上に向けて鉄と化した棒を投げ放ったヴァン。

「自分の能力が通じないのをわかっていて血迷ったか・・・」

するとシルヴァは、その棒に対しても磁力の力を発動させてその動きを操り始めた。

「今だ！風の力を思いっきり放て！拓也！」

そう言うヴァン。

「どういうことだ？」

状況がよくわかっていない拓也。

「すぐにわかる。後ろの仲間が攻撃を放つまでの時間が稼げればいいんだからやれ！」

「・・・わかったぜ、ヴァン」

と、木刀を思い切り振り回りに強風を吹かせた。

「!？」

その時、自在に動いていた鉄の動きが急に鈍りだしたのであった。

「このタイミングだ！放て！」

後ろにいるミナモにそう叫ぶヴァン。

「私とモエさんの融合攻撃。炎の力を纏いし光の矢！」

そして、思いっきりシルヴァの鉄の防御めがけて放たれる矢。

「ヴァン・・・まさかお前の目的は・・・」

「俺だってただやられ続けてきた訳じゃないぜ。いくら能力が凄いつて言ってもそれを扱ってるのは人なんだからな」

そう告げるヴァン。

「能力の限界・・・」

そう呟いた拓也。

「なるほど・・・いかに鉄を自在に操れる磁力の力でも一度に多くの物質を操る事は難しいということか・・・だが、それを含めたお前達の最後の攻撃もこの鉄の防御を敗れなければ意味が無い」

「破ります！ 私達の矢は貴方の防御を！」

そう告げるミナモ。

そして、矢は一直線に進むとシルヴァの目の前に立っている鉄の防御に直撃した。

「全ての磁力を鉄板の方に・・・奴の攻撃を押し返す」

そう言い能力を最大にするシルヴァ。

「それはただの矢ではありません。モエさんの炎の力・・・鉄を溶かせるほどの炎の力・・・そして、私は放つ矢に色々と力を加えることが出来ます」

「！？・・・まさか・・・この矢・・・」

鉄から感じる衝撃から何かを知ったシルヴァ。

「その矢には回転をかけています。一転集中の矢・・・それに回転が加わり鉄を溶かせる炎の力が加われば・・・」

そして、その直後鉄の防御に穴が開き防御を突き抜けた矢はシルヴァの肩をかすめ後方に飛んでいったのだった。

第14話：本部能力者の実力（1）

「・・・」

傷を受けながらも攻撃をしてきた拓也達をじっと見ているシルヴァ。

「かすただけじゃ倒れないよな…さすがに…」

「ミナモ…さん…もう一度炎の弓矢を…」

そう言うモエだが、かなり力を消耗しているのか疲れた表情をしていた。

「これ以上戦い合う必要はない。通れ…それが私の決断だ」

そう告げたシルヴァ。

「おい、シルヴァ。俺達はお前を倒したわけじゃねえぜ」

そう言うヴァン。

「一応私は本部の能力者だ…今は本部との接触はほとんど無いがそれでも今の本部の能力者といい勝負が出来ると思っている。そんな私と戦い本当に私を倒すことが本部以外でいるのだろうか…」

そう言うシルヴァ。

「なんだか難しい話だな…そう言うのはパスだ」

そう告げるヴァン。

「シルヴァ：本当に通っているのか？」

確認の為に聞く拓也。

「私が認めたのだ：好きに通行して構わない」

と、ここでミナモが

「どうしてですか？ 私達は：」

そう言った。

「事情は知らないし君達が普通とは違うことはわかっているが：何となくだが君達は本部に害となる存在ではないみたいだから：それが理由だ：さあ、行け。余計な本部の能力者が来る前にな：」

「そう言うことなら行かせてもらうぜ」

と、一番手でシルヴァの横を通過していったヴァン。

「俺が強くなったら今度は一対一で勝負しようぜ」

そう言い横を通り抜ける拓也。

「走れますか？ モエさん」

「うん：大丈夫：」

そして、それに続くミナモとモエ。

（しかし不思議な連中だな…そしてあの中の一人…あれは確実に天界の…）

そんな事を考えていたシルヴァ。

そして、シルヴァの試練的な戦いを乗り越えた拓也達はこの先にある地下第三階層への移動場所を目指して走っていた。

「す、すみません…ヴァン…さん」

小さな声でそう言うモエ。

「昔の事は無しにしてやるぜ。その代わり俺はもっと強くなつてすぐにお前のレベルを超えてやるからな」

そう言うヴァン。

「そうだ、ヴァン。お前ずっと一緒にいてくれるのか？」

そう聞いた拓也。

「俺とお前はライバルだからな…第三階層までは付き合ってやるがそこまでだ。次に会うときはお前を簡単に倒せるぐらいまで強くなっているからよ」

「楽しみだな」

走りながらそんな会話をしている拓也とヴァン。

「でも、シルヴァさん…傷は大丈夫でしょうか…そんなに深くないとは思いますが…」

そう言うミナモト。

「あいつはそんなに弱くねえよ。それにまだ本気を出しているわけじゃなかったしな」

そう告げるヴァン。

だが、そんなシルヴァの元にとある人物がやって来ていた事を拓也達は知らないのであった。

第14話：本部能力者の実力（2）

「…お前は」

「久しぶりね…私のことを覚えているかどうかは知らないけどね」

シルヴァにそう言う人物。

「ノヴァ…何故ここに…」

「一応私の上司のディオン様の許可をもらって来てるのよ」

そう言うノヴァ。

「本部でのトップ3の一人のディオンか…」

「一応私の目的はこの先へ行った侵入者を捕まえることなんだけど…その前に私自身やりたい事をおきたくてね」

そう言いシルヴァを見るノヴァ。

「通りたければ通ればいい…俺は…」

「あんな侵入者を捕まえられないばかりかすんなり通すなんて貴方がここにいても意味ないでしょ」

そう言うノヴァ。

と、その時シルヴァは高まるノヴァの力を感じていた。

「!？」

咄嗟に複数の鉄の板で周りを防御した。

そして、次の瞬間衝撃がシルヴァに伝わってきた。

「お前の能力…あの少女と同じだったか…」

「そうね…でも…こんな所でゆっくりしていた貴方の力なんて…私の力にはかなわないのよ!」

と、高まるノヴァの力。

「まさか…」

そして、シルヴァは鉄の板ごと吹き飛ばされ壁に激突した。

「私の力は炎…そして、炎を固形化したフレイムブレード!」

容赦なくノヴァはシルヴァの腕にフレイムブレードの一撃を与えるのだった。

「グウツ…」

「役立たずは本部には必要ないのよ。貴方の始末は命令として受けていないから命を奪うわけにはいかないけどね…動けない程度にはさせてもらうよ」

先程の攻撃で逃げる力も失っていたシルヴァは、ノヴァの連続攻撃

をかわすことが出来ずその身に全て受けていた。

「制裁はこれくらいでいいわね…あいつらが次の階層に降りる前に捕まえないとね」

そう言うとノヴァは拓也達が向かった通路の奥へと駆け出していったのだった。

その直後、隠れて様子を見ていたこの街の住人達がシルヴァの元に駆け寄っていた。

「大丈夫か！」

肩を貸す男達。

他の人達はシルヴァの傷の手当てなどを行っていた。

「傷が深いな…完全に治すのは…」

と、そんな時この街に新たな人物がやってきていた。

「すみません…高い力を感じたので様子を見に来たのですが…」

そう言いシルヴァたちの前に姿を見せたその人物。

その人物はまだ若い青年で、じっとシルヴァの状態を見ていた。

「兄ちゃん…あんたは…」

「貴方の事は知っていますよ。私も元々本部にいましたからね」

「お前…ロードか…」

そう告げるシルヴァ。

「会う機会もほとんどありませんでしたからね…ですが本部は貴方を切り捨ててきたようですね…まあ、あの力からするとあの人のようですが」

「ノヴァは強い…あの風の能力者達で勝てるか…どうか」

そう言うシルヴァ。

「噂になっている侵入者ですか…しかし、その前にまずは貴方の治療が先ですねシルヴァさん」

と、懷から何かを取り出したロードはそれをシルヴァに向けるのであった。

第14話：本部能力者の実力（3）

その頃、拓也達かというと…。

無事、第三階層へ迎える螺旋階段の手前までやってきていた。

「ここまでは順調だな」

そう言うヴァン。

「今はヴァンがいるから第一階層から第二階層に向かう時みたいにきつくはないだろうけど、もしもの時はモエを頼む。ミナモ」

「はい、任せてください。拓也さん」

そう返事をするミナモ。

「それじゃ行くぜ！」

思い切って螺旋階段内部へと突入した拓也たち。

「あれ・・・」

最初におかしいことに気づき声をあげたモエ。

「どういうことだ：見張りとかが一人もいない」

そう告げる拓也。

「罨でしょうか・・・出口の所に人を集めているとか」

そう考えるミナモ。

「例えそうだとしても拓也の風なら一発で狭い通路にいる連中なんて吹っ飛ばせるだろ」

そう言うヴァン。

「そうだな：考えていても仕方ない。いつ後ろから追っ手が来るかもしれないんだ：行こう」

少し考えた拓也だが、このまま突入することに決めた。

「ヴァン、後ろを頼む。間にモエとミナモ：さっきも言ったようにもしものはモエを抱えて移動してくれ」

「はい：」

見張りが一人もいないため、特に問題もなく螺旋階段を駆け下りていく拓也達。

「何だか人がいないのも嫌な感じですね」

そう言うモエ。

「何処に隠れていたって俺たちがいれば問題ないだろ。拓也」

そう告げるヴァンだが

「ああ、本部の能力者が出てこなければな」

呟くように言った拓也。

そうこうしている間に、第三階層入り口が見え始めていた。

「敵がいるかもしれないんだろ：ヴァン！」

「おうよ！」

隊列を入れ替え二人で先頭を進む拓也とヴァン。

だが、その時突然入り口上部からシャッターが降り入り口を封鎖してしまったのだった。

「なっ、何だよこりゃ」

そう告げるヴァン。

「：まさか！」

自分達が通ってきた道の先を見る拓也。

すると、自分達が先ほど出てきた第二階層の出口からもシャッターが降り封鎖されていた。

「閉じ込められた：」

そう呟くミナモ。

「正解よ、侵入者…というより私達本部に対する敵対者…そういった方がいいかしら」

そんな声が上部から聞こえ、姿を探す拓也達。

「拓也さん！あそこです」

ミナモが一足先にその人物を見つけ指し示した。

「女！？あいつも能力者か」

ヴァンがそう言う

「あたり前よ。私は本部から来たんだから…それはさておき…わかっていると思うけど貴方達を拘束させてもらうわよ」

そう言うと言の力を発動させるノヴァなのであった。

第14話：本部能力者の実力（4）

「あいつ、モエと同じ炎の能力者か」

そう言う拓也。

「私と同じ能力者が敵対者の中にいたの…まあ、あとでじっくり試してあげるとして…最初の標的は風の能力者」

と、炎弾を放ってきたノヴァ。

「散れ！」

拓也とヴァンが同時に叫び、メンバーはノヴァの炎弾を食らわない位置へとそれぞれ移動した。

「どう見てもあいつ遠距離タイプだぜ…まともに戦うには拓也…お前しか」

そう言うヴァン。

「わかってる。それに本部の能力者だ…最初から本気で行かなきゃ負ける」

そう告げる拓也。

「でも、一人じゃ…」

心配するミナモ。

「ヴァン…頼みがある」

「何だ？」

「ミナモとモエを連れて第三階層を進んでくれ。後ですぐに追いつく」

拓也がそう言う

「あの人、私より数倍も強い力を持っています。拓也さんだけの力じゃ」

そう告げるモエ。

「悪いなモエ。でも、俺も本気になったらモエ達も巻き込みかねないんだ…だから先に…頼む」

真剣な表情でそう言う拓也。

「あいつに勝つ策はあるのか？」

ヴァンが尋ねると

「一応な…少なくとも後退させるぐらいだろうけどな」

そう答える拓也。

「なら、行こうぜ」

ミナモとモエにそう言うヴァン。

「拓也さん…」

「ミナモ…約束…ちゃんと守るまで俺は倒れないからな」

そう言う拓也。

「…無事に追いついてくださいね」

そう言う拓也に背を向けるミナモ。

「とりあえず下の扉をぶち壊して先へ進むぜ」

ヴァン達は拓也から離れ第三階層への扉の前に移動した。

（遠くだからあまり会話は聞こえなかったが…あの風の能力者…何か仕掛けてくるか…一応は全員を捕らえるのが私の役目だが…）

と、ノヴァは何かを操作すると次の瞬間下のドアが動き出し開いた。

「なっ…」

驚くヴァン達。

「拓也さん、これって…」

「あいつが開いたんだろ…これであいつも本気で来るだろうな…」

そう言う拓也。

「拓也さんの足を引っ張るわけにはいきません。先へ向かいましょう」

先頭で扉の奥へ進んでいくミナモ。

そして、それに続くヴァンとモエ。

三人が通過すると同時に、扉はノヴァの操作により再び閉じられた。

「ミナモ達を進ませてくれたことに関しては礼を言うぜ…」

「さっきの炎弾は挨拶代わりだ。さっきのが本気だとは思うなよ。風の能力者！」

と、階段を駆け下りていくノヴァ。

「接近してくるか…なら」

刀を構え風を纏わせる拓也。

（斬撃系の武器に風的能力…一撃の殺傷能力は本気を出せばあいつの方が上だろうな…なら、こちらも…）

「行くぜ！」

向かってくるノヴァに対して、拓也は刀に纏わせた風を刃としてノヴァに放った。

「炎剣！」

と、次の瞬間風の刃は炎の剣によって真っ二つに切り裂かれたのだった。

「炎の剣…」

「驚いているか…まだこの境地にまでは足を踏み入れていないようだな…」

そう告げるノヴァ。

「炎そのものが剣の形に…あれも能力なのか」

「私は組織のトップに立つ三人に告ぐ力を持つ五星と呼ばれるグループの一人…そして、五星全員がこれ以上の力を持っている…無論トップの三人に関してはその更に上をいく」

「五星…」

「お前、リユートと戦ったことがあるそうだな…組織内でも話が出ていた」

そう言うノヴァ。

「まさか、リユートも五星とかの一人なのか」

拓也がそう聞くと

「そうだ…お前はただ遊ばれていたただけだ…だからこそこんな所にまで生きて来る事が出来た…だから、それもここまでだ」

炎剣を構えるノヴァ。

「能力の次のステップを持たないお前には勝てない」

そう言い放つと、再び拓也に向かっていくノヴァなのであった。

第15話：風と炎と能力の可能性（1）

自分の所に飛び込んできたノヴァの炎剣を、自分の刀で受け止めた拓也。

「グッ・・・凄い力だ・・・」

受け止めることは出来た拓也だったが、弾き返すことは出来ずノヴァの力に押され後ろの壁にたたきつけられてしまった。

「お前も自分の腕にはそれなりの自信があったのだろうが・・・ここではその程度の力・・・通用しない」

そう言い放つノヴァ。

「能力でも剣の力でもあいつに勝てねえってのか・・・」

「当然だが・・・炎剣だけが私の技ではないぞ！」

と、剣を握っていない方の掌から炎を放つノヴァ。

「!？」

とっさに刀を振るい、風的能力を発動させノヴァの炎をギリギリで防いだ拓也。

ぶつかり合った炎と風。

そして、互いの能力が相殺した時いつの間にかノヴァが拓也の懷に

入り込んでいた。

「しまっ・・・」

頭で考えるよりも、足を動かしその場から離れた拓也。

だが、ノヴァが振りおろした炎剣は拓也の右腕に傷を付けた。

「ううつ・・・」

「利き腕に傷を負ってしまったては、まともに戦うなど出来ないだろう。おとなしく私に捕まれ・・・風的能力者」

そう告げるノヴァ。

（確かにやばいな・・・思った以上に相手が強いな・・・だけど・・・）

ノヴァを見ながらそんな風に考える拓也。

「俺はどんなに傷つけられたって勝つまでやり続けるぜ・・・ノヴァ」

そう言う拓也。

「・・・そうか。なら、仕方ないな。私の炎に包まれて一時眠ってもらうとしようか」

そう言うとノヴァは拓也との距離をとるために螺旋階段の上の方へと跳んだ。

そして、構えた両手に強大な炎を出現させるノヴァ。

「確かにこれが最後のぶつかり合いだな・・・一か八かの賭・・・絶対に成功させてやる」

そう言う拓也なのであった。

第15話：風と炎と能力の可能性（2）

「後のことは後で考えればいい。今は、この戦いを乗り切る」

そう考え身体の痛みに耐えながら、刀を構え風を纏わせる拓也。

「能力の相性を知りつつ正面から挑むか・・・どちらにしてもお前は生かして連れていかなければならない・・・あまり余計な抵抗はしないでほしいがな」

そう言うノヴァ。

「来いよ！ノヴァ」

そう言い放つ拓也。

「五星の一人である私をなめるな。この攻撃で終わりだ！」

全力で大量の炎を放ったノヴァ。

「さあ、こっちも最後の攻撃だ・・・成功してくれよ！！」

そう告げると思い切り風を放つとともに、残しておいた力で風を少しコントロールし回転を加えた。

そして、二人の中央でぶつかり合う炎と風。

だが、二人の考え通り炎は風を吸収してより大きな炎に変化していった。

「この程度のこと、予想できていただろうに・・・これでお前は・・・」

そう告げるノヴァ。

「そうでもないぜ・・・よく見てみろよ」

そう言う拓也。

「何だと・・・」

しっかりと様子を見ていたノヴァ。

しばらくして、自分の放った炎の異常に気づくノヴァ。

「何だ・・・炎が渦を・・・」

驚いているノヴァ。

「俺が放った風に回転を加えて渦を作っていたんだよ。そして、それが・・・」

と、ノヴァはこの螺旋階段のエリアの状況変化に戸惑っていた。

「このエリア全体が暑い・・・それにさっきからあの炎をコントロールしようとしているのに・・・制御が・・・」

そう言うノヴァ。

「俺だってもう制御できないぜ。炎と風が融合し作られた渦は更に回転を増して、このエリアを飲み込んでいく」

いつの間にか渦巻いた炎は大きくなり、このエリア内を炎が飛び交っていた。

「まさかお前これを狙って最後の勝負に私を・・・」

「ああ、あのまま接近戦で戦われてたら勝ち目がなかったからな・・・もちろん成功する保証はなかったけど・・・とりあえずは何とかなったぜ」

そう言う拓也。

「何とかあっただと・・・私は多少炎に耐性がある。だが、お前はまともに受ければ焼け死ぬぞ。もはや風で防御できる力もないだろう」

そう言うノヴァ。

「それでもこれしか方法がなかったんだ。けどな・・・まだ、俺の手は残っているぜ・・・それをこれからやってやる」

そう告げると、また刀を構える拓也なのであった。

第15話：風と炎と能力の可能性（3）

「まだ、手が残っているだと・・・」

そう言うノヴァ。

「ああ、体力も能力もあまり残ってないけどな・・・この状況を逆
に利用して乗り切る方法があるんだぜ」

そう告げた拓也。

「なにをするつもりだ。何をしようとしてもこの状況で・・・」

と、拓也はノヴァの方に背を向けた。

そして、扉の前に立つ拓也。

「この扉を破壊する・・・」

「破壊だと・・・確かに能力なら破壊できるかもしれないが・・・」

そう言うノヴァは気付いた。

「まさか!？」

「ああ、この部屋の中は密室だ。そして、辺り一面炎に包まれている・・・そんな所に扉を破壊してそこに空気を送り込んだら・・・」

そう言う拓也。

「そんなことをすれば大爆発を起こすぞ！そんなのを間近で受ければ能力者のお前だとしても……」

「敵なのに心配してくれるのか？」

拓也がそう言う

「そんな訳ないだろう。私はお前を生かして連れていくのが受けた使命だ」

そう言い放つノヴァ。

「まあ、わかってるけどさ。俺は死なないから安心しろ。ミナモ達と約束したしな」

そう言い刀を振り上げる拓也。

「ぐっ……」

すでに間に合わないと感じたのか、ノヴァは防御の準備を始めた。た。

「斬り裂け！俺の風よ！」

残った力を刀に乗せて、扉めがけて風の力と刀の斬撃を放った拓也。

その攻撃を受けて亀裂が入り始める扉。

「確かに能力ならあの扉は壊せるが……これまでの戦いで能力を

ほぼ使っているのにまだあれだけの力を・・・」

「俺は、ミナモ達の所に行くんだ！」

強い思いと共に拓也の刀は、扉を斬り裂きその通路の裂きに飛び込んだ。

そして、その直後空気を得て中の炎は一気に燃え上がり内部で大爆発を起こしたのだった。

そして、その爆発は拓也が飛び込んでいった通路の先にまで影響を及ぼしていくのであった。

第16話：地下世界の騒動

「あいつ・・・」

この辺りを行き交っている炎の合間から、次の階層への通路へ飛び込んでいった拓也の姿を見ていたノヴァ。

と、その時自分の後ろのドアが開かれようとしているのに気づいた。

「ちっ・・・」

ドアが開いた瞬間、そこに飛び込み螺旋階段のエリアから流れ込もうとしている炎風に対して能力でバリアを張ったノヴァ。

「ノヴァ様!？」

どうやらドアを開けたのは、組織からここの様子を見に来たらしい下っ端の人間だった。

「不用意に開けやがって・・・まあ、それはいい・・・お前達!今すぐここから一番近い集落の人間の中から水系の能力者を探して連れてこい!組織に関係あるうがなろうが問題ない。今は、この事態を止めるのが先決だ!急げ!」

「はっ!!」

ノヴァの指示を受けて、すぐさま行動を開始したその人物達。

(ただでさえ能力を結構使っているんだ・・・早く何とかしてくれ

ないと私のバリアも・・・)

そう思いながらかすかに見える第三階層への扉に視線をやるノヴァ。

(幸いにも第三階層はあの構造になっているし町もない・・・被害は少ないだろうが・・・ここを炎が通過すれば集落にも火の手が回る・・・それは流石に止めないとな)

自身のバリアに力を集中させるノヴァ。

そして、この事態は組織にも別ルートから知らされていた。

「第二階層と第三階層をつなぐ螺旋階段のエリアから大量の炎・・・お前の部下が派手にやってくれたみたいだな、ディオーン」

そう告げた少し目つきの悪い男。

「すでに人は向かわせてある。心配は無用だ、ガリユウ」

そう告げるディオーン。

「なんなら俺の部下を貸そうか？最高の水使いを」

ガリユウがそう言う

「これ以上五星を一つの場所に動かすわけにはいかないだろう。万が一のこともある・・・とにかくこの件は私で処理をする・・・お前は他の方に手を回してくれ」

そう告げたディオーン。

「ディオンがそう言うのなら・・・そうさせてもらいますよ・・・
おそらくは全員第三階層に移動したはずですからね」

何やらモニターを見ながらそう言うガリユウ。

その頃、組織内の一室では・・・。

「探っているわけではないが情報は自然に集まってくるな・・・リ
ュート」

「俺は時が来るまで待つさ。拓也と本気の勝負が出来る時までな」

天井を見ながらそう言うリュート。

「その時は案外近いかな・・・リュート以外の五星も動き出して
いる・・・お前がライバルと認めた拓也もそう簡単に勝ては・・・」

レイドがそう言うのと

「あいつは突破してくるさ。あいつも俺と戦うまでくたばらねえ奴
だろうからな」

笑みを浮かべてそう言うリュート。

そして、螺旋階段エリア内で爆発が起きた頃・・・。

先に第三階層に足を踏み入れていたミナモ達は・・・。

第17話：第三階層・大地の迷宮（1）

一足先に第三階層に突入し、進んでいたミナモ・モエ・ヴァンの三人。

「この階層・・・今までのとは違いますね」

そう告げるミナモ。

「今までの階層の壁は金属だったり石だったりして人工的な感じだったが・・・ここのはそのまんま大地を壁にしたって感じだな」

そう思うヴァン。

「お二人ともこの階層は初めて・・・何ですよね」

そう聞くミナモ。

「大体組織の連中以外は自分の階層以外には出入りしないから・・・俺もこの階層より下は知らねえよ」

そう答えるヴァン。

「お婆ちゃんなら何か知っているかもしれないけど・・・」

そう呟くモエ。

「まあ、階層降りていくたびにこんな会話していても意味はないんだ。それよりも今はここを抜けることを考えようぜ」

そう告げると一度足を止めるヴァン。

辺りは何処を見ても土の壁だらけで、通路はまるで迷路のようになっ
ていた。

「この迷路を抜けないと次の階層へはいけないみたいです」

そういうミナモ。

「壁が土なら壊して進むって考えもあるが・・・」

ヴァンがそう言う

「でも、それで組織の人に見つかったらこの階層のことをよく知らない私達に勝機はありません・・・せめて拓也さんと合流できれば」

そう言うミナモ。

「そうだな・・・この階層の構造上途中に町があるとは思いいく
しな・・・さっさと抜けていくか」

そう考え再び移動を始めるミナモ達。

だが、そんな時第三階層入り口近くの大地に囲まれた小さなエリア。

そこには、一人の男が土の壁に手を当てて意識を集中させていた。

「さっきの螺旋階段からの爆発の影響で感じられなくなっていた大地の
意思がようやく感じられるようになったな・・・おかげで進入

者の位置も把握できた・・・そう簡単にここを抜けさせるわけには
いかない。体力を消耗させ、そして捕らえてやろう」

そう考えていたその男。

そして、体力も気力も限界の中第三階層にやってきた拓也は・・・。

第17話：第三階層・大地の迷宮（2）

限界の近い身体で第三階層へとたどり着いた拓也。

「何だこの階層・・・周り全て土だな・・・って、観察している場合じゃないな」

辺りを警戒しながら、どこか安全な場所を探す拓也。

「とりあえずこの壁の裏に・・・」

壁の裏に回り込み、そのまま座り込む拓也。

「これじゃミナモ達と合流なんてすぐには無理だな・・・さすがにノヴァ戦のあのやり方は無茶すぎたか」

後悔しつつも、それがどうしようもないことは拓也もわかっていた。

「ほとんど能力が使えなくなって・・・本当に俺はまだまだよな・・・俺はただ剣術を能力でアップさせてるだけみたいなものだしな・・・」

と、拓也は自分が今まで出会った能力者を思い出していた。

「炎の能力者モエとノヴァ・・・鉄のヴァン・・・そして、水のリユート。リユートと一緒にいた雷のレイド。あと、ディオって奴も能力者だったな・・・それと第二階層を守っていたシルヴァ。モエとヴァン以外は全員ここの組織の能力者だったよな・・・俺はミナモやモエを守っていかなくゃいけないし、ミナモが目的を達するた

めがんばらなくちゃいけない」

そう言いながら天井を見上げる拓也。

「でも俺は組織の能力者にほとんど勝てていない。シルヴァはヴァンと協力して勝った・・・ノヴァは一人で戦って勝てたけどこんな状態じゃこの先絶対に生き残れない・・・この先のために俺が得なくちゃいけないこと・・・」

と、限界ながらも手のひらに力を込める拓也。

「斬撃のようにはつきりと目に見える風すら今は作り出せない・・・どうせじっとして休むしかないなら・・・ここで少しでもわずかなこの残りの能力で得られるものを得てやるんだ」

そんな強い意思を瞳に宿し、残りの風の力を周囲に発動させていく拓也。

そして、同じ頃ミナモ達はと言うと・・・。

「さっきからおかしいな・・・ちっとも出口の方にたどり着かないぜ」

そう告げるヴァン。

「甘くみてたのかもしれませんが・・・私も少しはその可能性を考えていましたけど・・・」

ミナモがそう言う

「何か知っているんですか？」

そう聞いてきたモエ。

「この階層にいる能力者・・・大地を操る能力者・・・」

「ちょっと待てよ。それじゃこの広すぎる階層全てのこの壁や道の大気を操ってるって言うのか？いくら組織の能力者でも不可能だろ」

そう告げるヴァン。

「ですがこの迷宮・・・能力を使えば私達を出口に行かせないようにする事なんて簡単なはずです」

そう言う歩みを止めるミナモ。

「もしかしなくてもってやつか・・・」

ヴァンがそう言う

「はい、間違いなく私達は相手のテリトリー内で監視されてるような状態です」

真剣な表情でそう言うミナモなのであった。

第17話：第三階層・大地の迷宮（3）

「それじゃどうすればいいんですか？」

そう尋ねるモエ。

「何とかここを抜ければ能力も及ばなくなるんですけど・・・」

そう言うミナモだが

「実際難しいだろ。この大地を使って自由にこっちを妨害出来るんだ。下の階層へ行ける通路になんて行かせてくれないだろうからな」

そう告げるヴァン。

そして、この階層を仕切っている大地の能力者・アース。

「迷宮内の感知しているエネルギーの動きがゆっくりになったな・
・この階層の秘密に気付いたか」

そう告げるアース。

「だが気付いたところでこの階層に足を踏み入れた時点で運命は決まっていたのだ」

そして、別の周囲の壁に触れていくアース。

そして、自身の能力を使いその力の発動はミナモ達の所で起こり始めていた。

「なっ!？」

突然自分たちの目の前の大地から壁がせり上がってきて、驚きの声をあげるヴァン。

「おいおい、何かやばい感じがするぜ・・・こんなところで閉じこめられたら終わりだ」

そう告げるヴァン。

そして、すぐに駆けだしていくミナモ達。

走り抜けている道の壁や大地からは、大地の遮蔽物が飛び出しミナモ達の行く手を遮っていた。

そして、こんな状況の中ヴァンは走りながらある事を考えていたのだった。

その頃、密かにこの階層で限界に近い身体を癒していた拓也はとうと・・・。

未だ動けずに回復につとめていた。

そしてまた、この第三階層に誰かがやってこようとしていることなど、拓也たちもアースも知らないのであった。

第18話：ヴァンの役目（1）

「大地を操る能力か・・・厄介な奴がいたものだな」

走りながらそう言うヴァン。

「ヴァンさん？」

いつもとは様子の違うヴァンを不思議に思うミナモ。

「お前達・・・しっかり逃げろよ」

突然そう言ったヴァン。

そして、その場に立ち止まった。

「ヴァンさん、立ち止まったら・・・」

そしてそれを察知したかのように、大地の壁は高くそびえ立ちヴァン達の逃げ場を失わせていた。

「閉じこめられちゃいましたよ」

そう言うモエ。

「心配するな・・・今度は俺が道を切り開く。って、お前達を先に行かせようとするのは二回目だったな」

そう告げるヴァン。

「私達を先に行かせるって・・・」

ミナモがそう言う

「お前達と拓也にはやらなきゃいけない事があるんだろ。お前達が無事なら拓也と必ず合流出来る・・・だから今は・・・」

と、ヴァンは大地の壁に手を触れさせた。

すると触れた所から鉄へと変わっていく大地。

「!？」

そして、大地を操っていたアースもそんな大地の変化に気付いた。

「まさか大地が別の物質に変換・・・」

そしてヴァンはというと、地面の大地にも手を触れ地面も鉄に変えていった。

「流石に大地の容量がでかいからな・・・どんどん能力のエネルギーが使われていく・・・」

「ヴァンさん・・・これは」

尋ねるミナモ。

「大地を鉄に変える。そうすれば大地の能力者は鉄と化した部分は操れなくなる」

「でも・・・」

心配そうにヴァンを見るモエ。

「お前達を通れる場所だけを囲むように全て鉄に変えれば、大地の壁を壊しても再生できない・・・だからその隙にお前達は行け」

そう言うヴァン。

「でもヴァンさんは・・・」

「拓也は信じて俺は信じちゃいけないのか？俺だってやる時はやるぜ」

真剣なヴァンの表情をこちらにも真剣な表情で見ていたミナモ。

「わかりました・・・絶対に後で会いましょう。ヴァンさんも私達の仲間なんですから」

そう言い微笑みを見せるミナモ。

「俺の考えじゃ大地の鉄化を止めるために直接ここにやってくるだろうから・・・だから早く行け・・・最初の通路は問題ないぜ」

そう言うヴァン。

「行きましようモエさん。私達の仲間はきっと追いついてきてくれます」

と、光の弓矢を出現させその一撃で鉄によって外側の大地と離された大地の壁に穴をあけていくミナモ。

そしてその後が続いていくモエ。

「絶対に無事で・・・」

そう小声で呟いたミナモ。

「・・・今回ばかりは無理かもな」

ミナモ達がこの場を離れてからそう呟いたヴァン。

そして、アースはというとヴァンの考え通りに行動を起こしていた。

「ここを離れるとこの階層全体の操作は出来ないが、まずは障害の排除からだ」

と、アースは大地に触れ大地を蛇のように変化させそれに乗り移動していった。

そして更に、この階層にやってきた謎の人物はアースが移動していたのを見送ると動き始めるのであった。

第18話：ヴァンの役目（2）

ヴァンの援護を受け、第三階層の迷宮を突き進んでいくミナモとモエ。

「ミナモさん・・・」

ミナモに話しかけるモエ。

「・・・大丈夫です」

真剣な表情でそう言うミナモ。

そして、大地を鉄へと変えているヴァン。

更に、その場に向かっていているアース。

そして、拓也はと言うと・・・。

「風の流れが変わった・・・っ・・・これ以上は能力の限界・・・」

拓也が風の能力を消そうとした時、その風に何かの気配が触れ誰かが近くに來ているのに気付いた拓也。

（何だ・・・いきなり気配が・・・だけどこれ以上能力は・・・）

そして、拓也のいる場所に現れた人影。

（・・・）

「かなり弱々しいですが、風的能力者ですね・・・この地下世界内で噂になっている」

「誰だ・・・まさか組織の連中・・・」

そう言う拓也。

「無理に動かない方がいいです。能力の使いすぎでかなり身体に疲労も溜まっているはずですから・・・それと僕は今は組織とは関わりはありません」

そう告げたその男。

「今だって・・・」

「僕の名前はロード。シルヴァさんから話を聞いて興味を持ったので追ってきたんですよ」

そう言いながら、ロードは懷から銃を取り出した。

「武器!？」

驚く拓也。

「安心してください。ただの治療です・・・」

そしてロードは、ポケットから一個の弾丸型の何かを取り出し自分の銃にセットした。

【キュアⅡカートリッジ・チャージ】

そんな音声がロードの銃から聞こえてきた。

「何なんだ・・・」

そして銃口を拓也に向けるロード。

「!？」

「一瞬で終わりますよ」

【キュアⅡアビリティ・オープン】

その声と共に引き金を引いたロード。

そして、銃口から放たれたエネルギーが拓也に命中するとエネルギーは拓也を包み込んでいった。

「これは・・・身体の傷が・・・それに能力のエネルギーも身体中に・・・」

驚いている拓也。

「僕はこの銃で色々な力を扱えるんです」

そう言うロード。

「お前能力者じゃないのか？」

拓也が尋ねると

「ええ、僕は元々研究者だったんですよ……この銃はその研究の成果ですね……」

そう告げるロード。

「ロード、俺たちなんかに力を貸したらお前も……」

「承知の上ですよ。それに、組織の方もすでに僕を用済みとしているでしょうし」

そう答えるロード。

「身体が楽になったな……すまないロード」

「では行きましょうか。君は仲間と合流するのでしょうか」

ロードがそう言う

「何でその事を……」

「シルヴァに聞きました……あと、出来れば手助けをしてやって欲しいとも……」

「シルヴァは……元気なのか？」

何故かそんな事を聞く拓也。

「大丈夫です。さあ、この階層の主が離れている間に移動しましよ

う」

と、座っている拓也に手を差し出すロード。

拓也はロードの手を取ると立ち上がり、先にいるミナモ達との合流を期待していくのであった。

第18話：ヴァンの役目（3）

その頃、ヴァンは辛さに耐えながら能力を使い続けていた。

「そろそろ茶番は終わりにしましょうか」

そう言い生き物のように動く大地に乗ったアースがヴァンの前に姿を現した。

「遅いお出ましたな・・・忙しかったのか？」

そう聞くヴァン。

「ああ、忙しいよ。何せ私はこの階層の全てを管理しているのだから」

そう答えるアース。

「で、俺を潰しに来たのか？」

「排除だ。その後組織に連れ帰り全て調べ上げる。しかし愚かな男だ」

アースがそう言う

「どういう意味だ・・・そりゃ」

「組織に関わりのない能力者などいくらでもいるだろうが、組織に抵抗する能力者は珍しい・・・それ即ち愚かというもの」

そう言うアース。

「んな所で説教なんてする奴じゃねえだろ・降りてきて戦ったらどうだ」

「言われずとも」

アースは大地の蛇を降下させると今は鉄と化した床に降り立った。

「・・・」

そしてそんなアースの様子をじっと伺うヴァン。

「まずは私の大地を汚すその鉄の能力を消してもらおうか・・・大地の弾丸！」

と、大地の蛇から複数の弾丸がヴァンに向けて放たれた。

「ぐわっ・・・」

声を上げるヴァン。

「鉄の能力さえ消えれば再び私は・・・」

「何勝った気でいるんだ・・・大地ヤロー」

直撃を受けたはずのヴァンは、ほとんどダメージを受けていなかった。

「貴様・・・何をした？」

「そういやお前に鉄の能力者の特権を話してなかったな」

ヴァンがそう言う

「特権だ・・・」

「俺の力は触れたものを鉄に変えるんだけどよ・・・着ている物に
関しては俺の意思で鉄化出来るんだよ」

そう説明するヴァン。

「説明ありがとう。なら、そんな薄い鉄の衣服を破る攻撃を行えば
いいということだな・・・」

と、大地の蛇は前面に大きな大地の塊を形成していった。

「放てるのはパチンコ玉みたいなのだけじゃねえのかよ」

ヴァンがそう告げると

「組織の能力者・・・あなどるなよ」

そして渾身の一撃を放たせるアース。

「ぐっ・・・」

爆発と共に辺りは土煙が舞った。

「いかに鉄化したとしても衣服による防御は・・・」

「だからよ、お前は勝ちと判断するのは早いって言ってるんだ!」

と、声がした方を向くといつの間にかヴァンは大地の蛇の上にいた。

「何故、そこにいる!!」

大地の蛇を操り振り落とそうとするアース。

「これから何をするか・・・頭の良い組織の能力者ならわかるよな・・・」

そして、ヴァンは大地の蛇に手を当てた。

「貴様!」

と、ヴァンが触れた所から鉄へと変化していた。

「させるかっ!」

アースは鉄化されている辺りより前部分を本体より切り離し、切り離した大地を自分の前に落下させた。

そしてヴァンは、大地の蛇をある程度の所まで鉄化させると鉄化した蛇から飛び降りた。

「さて、ここから持久力勝負だな」

疲労していながらもそう言い放つヴァンなのであった。

第18話：ヴァンの役目（4）

「見事・・・と言うしかないのだろうか・・・この私は組織では五星に及ばないまでも、この環境においては最強の能力者だった。そんな私をここまで追いつめたのだ」

そう告げるアース。

「何だ・・・誉めたって俺は手は抜かないぜ」

そう言うヴァン。

「惜しいものだな・・・お前が組織にいれば私と良いパートナーが組めたのだがな」

そう言うアース。

「あいにくだが俺は組織の能力者と組む気はない・・・とりあえず無駄話は終わりにして、お前にとどめをさしてやるぜ・・・その残っているひとかたまりの大地を鉄に変えればお前に勝つ手段はなくなるんだからな」

そう言い放つヴァン。

「お前は勘違いをしている・・・確かにこの塊の大地を奪われれば私の勝機は一気になくなるだろう・・・だが、今のお前にそれだけの力が残されているのか・・・」

ヴァンから視線を逸らさずに話すアース。

「確かにお前等みたいに徹底的に能力を磨いているわけじゃないかな・・・・だけどな・・・・俺も男だ。大事な所でへばったりはしないぜ」

そう言うヴァン。

「能力者なりのプライドか・・・・それとも仲間とやらがお前を強くしているのか・・・・まあ、どちらでもいい。お前に力が残されているようにも、私には見せていない奥の手がある」

そう告げるアース。

「・・・」

真剣な表情でアースの様子を伺うヴァン。

「ハツタリか・・・・とは聞かないのか？」

アースが尋ねると

「組織の能力者様がんな事をいちいち言わないだろ・・・・見せてみるよ・・・・お前の心の力をよ」

「ならば・・・・私の力を・・・」

大地の塊に手を置くと、能力を一気に開放させた。

バラバラになっていく塊。

そしてそれはアースの操るままに宙を飛び交っていた。

そしてそれは次々とアースの身体に付着していった。

「何だよ・・・これは」

驚いているヴァン。

「お前も自分の衣服を鉄に変えていただろう・・・私のこれと同じ・・・大地の鎧」

そう告げるアース。

「お前、そっちのスタイルが・・・」

「では・・・終わらせようか地怨舞【ちえんぶ】！」

と、まるで舞うように動き連撃を放つアース。

「ぐうつ・・・鉄化して防御してるってのに・・・」

「この姿の時は常に大地と私は触れている・・・つまりいつでも最高の状態で扱える・・・攻撃も防御もな」

そう言うアース。

「ちっ・・・結構良いところまでいったから何とかなると・・・」

「ならない！この一撃で粉碎せよ・・・地裂撃【ちれつげき】」

一点集中型のただのパンチ。

だが、能力により強化されたパンチはヴァンの防御を破りヴァンに大きなダメージを与えたのであった。

「すまねえ・・・やっぱり俺は・・・ここまでだな・・・ミナモ、モエ・・・上手く逃げ切れよ・・・」

そう呟いたヴァンは、全ての能力を解除されその場に倒れるのであった。

第19話：悲しみを乗り越えて（1）

「この男を倒して能力を解除させたが、すぐには大地に戻らないか・
・仕方ない他の奴らを捜すにはまだ時間がかかる。まずはこいつ
だけでも組織の方に連れて行くか」

そう言うときアースは、大地に戻った部分でまた蛇を作り出すと、ヴァンと一緒にそれに乗りこの階層の端の方へ向かった。

そして、大地の蛇が上空に伸びていくのを迷宮の中から見ていたロードと拓也。

「能力は使わず突き抜けましょう。幸いにも貴方のお仲間のおかげで楽に進めます」

辺りを見て拓也も大体理解していた。

この状況を作り出したのがヴァンだということ・・・。

おそらくという段階だが、ミナモとモエは無事に逃げ切れたのだろうということ・・・。

そして、先ほど見かけた相手にヴァンが倒されたのだということ・・・。

「冷静ですね・・・と言うのは失礼かもしれませんが」

そう告げたロード。

「俺の責任だからさ・・・こんな状況を招いたのは」

そう言った拓也。

「君はやるべき事をやり、今僕と行動している・・・僕はシルヴァから君達のことを託された・・・シルヴァは君の中に何かを見た・・・きっと今の地下世界を変える何かを・・・」

そう述べるロード。

「ロード・・・もう一度回復の弾丸を・・・そしたら全力でミナモ達に追いつく・・・」

そう告げる拓也。

「わかった・・・」

静かに了承の返事をする、ロードは拓也にもう一度回復のエネルギー弾を放つのであった。

その頃ミナモとモエは無事に次の階層への入り口に到着していた。

（次第に鉄になった大地が元に戻り始めてる・・・ヴァンさんは・・・）

少し悲しそうな表所を見せるミナモ。

「ミナモさん、これからどうするんですか？」

そう聞いてきたモエ。

「待ちましょう。これ以上私達だけで先に進むのは危険だから」

そう考えるミナモ。

だが、ミナモ達は気付いていなかった。

ミナモ達を見ている視線がある事を・・・。

「さすが元・組織のメンバーだな」

そう言った拓也。

「これくらいなら問題ないですよ。それより道が出来ているとはいえ、この階層には能力者以外にも組織の人間がうろついているはずですから・・・気をつけないと」

そう言うロード。

「ミナモ、モエ・・・」

仲間達のことを思い、走るスピードを上げる拓也なのであった。

第19話：悲しみを乗り越えて（2）

「・・・」

じつと来るであろう拓也を待つミナモとモエ。

「すみません・・・」

突然そう告げたミナモ。

「ミナモさん？」

「全て私が原因なんです・・・拓也さんやモエさん・・・そしてヴァンさんも・・・」

そう言うミナモ。

「・・・みんなそんな事思っていないと思いますよ・・・多分ですけど」

そう告げるモエ。

「私は私の意思でついて行くことを決めました。拓也さん達だって同じです」

そんな事を言うモエをじつと見ているミナモ。

「私も疲れちゃってるんですかね・・・気持ちが悪けちゃってましたね」

そう言うミナモ。

「ありがとうございますモエさん。これでまた・・・」

そこまで言った時、ミナモは周囲の状況に気付いた。

「複数の気配が近くに・・・」

そう告げた時、二人の視界に複数人の男達の姿が入ってきた。

（気付かなくちゃいけなかったのに・・・ここで捕まったら・・・
拓也さんやヴァンさんの頑張りが・・・）

そう思うミナモ。

「あの・・・ミナモさ・・・」

モエが言い終わる前に、ミナモはモエの手を掴んでいた。

「逃げますっ」

そして一気に駆け出すミナモ。

それを見て男達も急ぎ足気味に向かってきていた。

ここに到達するまでも体力・気力共に消耗しているミナモ。

そんな中の限界の力で走っていた。

しかしながら、男達の方が確実に力も速さも上回っていることはミナモにもわかっていた。

だからこそ捕まれば終わりだと知り逃げていた。

「ミナモさん・・・疲れてるのに・・・」

「モエさんこそ・・・私が体力万全で飛べる事ができれば・・・」

そんな話をしている間にも、距離を縮めてくる男達。

「拓也さん・・・」

と、ミナモが諦めかけていたその時突然男達の動きが止まった。

「あれ・・・どうしたんでしょうか」

疑問に思うモエ。

と、男達の前に一人の青年が姿を見せた。

「ミナモさん・・・あれって・・・」

驚いているモエ。

「ここはあいつが管理してる階層だ。能力者はともかくお前達がいると邪魔になる」

そう男達に告げたのは雷の能力者・レイドであった。

「しかし・・・侵入者を捕らえるよう・・・」

男の一人がそう言う

「なら俺が受け継ぐ。お前達は他の警備に回れ」

「了解しました」

レイドの指示を受け、この場から離れていく男達。

「さてと・・・」

男達からミナモ達に視線を変えるレイド。

（相手は一人になりましたけど・・・状況は逆に・・・雷の能力は拓也さんの風と同じように速さがある能力・・・）

モエを自分の後ろにいさせて守ろうとしているミナモ。

「動く気がないならこちらから行く」

と、レイドからほとぼしる雷撃。

それは、ミナモ達の周囲を駆け巡っていった。

「・・・ミナモさんっ！」

突然ミナモの手を取り駆け出したモエ。

その行動に驚くミナモ。

「疲れてますけどまだ走れますから」

そう言うモエ。

「まだ走れるのか・・・意外と持久力はあるのか・・・なら追わせ
てもらおうか」

そう告げるとレイドも行動を開始するのであった。

第19話：悲しみを乗り越えて（3）

「・・・っ・・・」

疲れが足にきて転びそうになっても、レイドから逃げ続けるミナモとモエ。

そして、一定の距離を保ちながら追いかけているレイド。

「そろそろいいか・・・」

と、手をかざすレイド。

「ミナモさん、何か来ます」

そう言うモエ。

「雷閃！」

レイドの手のひらから放たれた雷の閃撃は、壁や床にぶつかり炸裂した。

「モエさんっ、こっちに」

横に通路を見つけたミナモは、今度は自分がモエを引っ張り通路に飛び込んでいった。

「とりあえずこれで指示通りだな・・・後は・・・」

更に雷の力を込めていくレイド。

「さっきの閃撃じゃない攻撃・・・」

「雷閃剣」

と、剣状に形どられた雷が複数ミナモ達の頭上に出現した。

「上・・・から・・・」

「・・・！」

そして、レイドの合図と同時に頭上の雷剣は全てミナモ達の周囲の床に落下した。

「えっ・・・どうして・・・」

直撃するものとはかり思っていたミナモは、驚いた表情を見せていた。

「じゃあな・・・」

そう呟いたレイド。

その直後、ミナモ達の足下の床が崩壊しミナモ達はその下へと落下していった。

「本当にたどり着けるのか・・・こんな調子・・・」

レイドがそこまで言った時、レイドの顔の横を風の刃が通り過ぎて

いった。

「風の能力者……」

「レイドだったよな……お前ミナモ達を！」

今にも飛び出しそうだった拓也を止めるロード。

「お前……確か魔銃使いのロードか」

そう言ったレイド。

「面識はなかったはずですがよく知っていましたね……雷のレイド君」

そう告げるロード。

「組織でも優秀だったお前は組織内にデータが残っている……今となってはいらぬものだろうが……」

「ロード、こいつは……」

「冷静になりなさい……彼は一度も能力を使って直接当ててはいませんでしたよ」

そう言うロード。

「だったら……さっきのはどういふつもりだ」

そう聞く拓也。

「リ्यूトがお前との戦いを望んでいるからだ。リ्यूトの所にたどり着く前に終わってしまっってはな」

そう告げたレイド。

「それで隠し通路へ彼女達を追い込めたわけですか・・・しかし良いのですか？」

「俺はあくまでリ्यूトについていく・・・組織のトップ3が何だとか関係ない」

そう言い放つレイド。

「では僕達も急ぐとしましょう。この階層の主が戻ってくる前に・・・」

そう言ったロード。

「そうした方がいいだろ。俺も戻らないと怪しまれるからな・・・」

「・・・レイド・・・」

と、拓也を見るレイド。

「俺もお前に興味を持っている・・・リ्यूトとの戦いが終わった俺とも戦え・・・風の能力者・・・いや、拓也」

「ああ、今回の事はミナモ達を助けるためにやってくれたみたいだけれどな・・・でも俺は許さないからな・・・」

そして拓也とロードはミナモ達の落ちた穴に飛び込みミナモ達の後を追っていくのであった。

（・・・リユートは五星の一人だが・・・四番目だ・・・他の三人に出会わずにたどり着けられるか・・・拓也・・・）

レイドはそう思いながらこの場所から退散していったのであった。

第20話：再会

ミナモ達が落ちた穴に飛び込み、隠し通路を進んでいく拓也とロード。

「そんなに入り組んではいけませんから、時間もかからずに出会えるはずですが・・・」

そう告げるロード。

「ロード・・・まだ回復の弾はあるのか？」

そう聞いた拓也。

「弾は属性一つにつき三回まで使えます。しかしながら僕の魔銃の弾は自然界・・・つまり周囲のエネルギーを吸収し使った分のエネルギーを充填してくれるんです」

そう説明するロード。

「まだ撃てるならミナモとモエの回復を・・・」

拓也がそう言うと

「構いませんよ。今の僕は貴方の味方なのですから。貴方の仲間が僕にとっても仲間というわけです」

そう告げたロード。

「ありがとな・・・」

そう呟いた拓也。

と、その直後走っていた足を止めた拓也。

「どうしましたか？」

「感じる・・・微かな炎の力・・・狭い隠し通路だからわずかな風に乗って感じるんだ」

そう言う拓也。

「・・・君には最初から才能があったのかもしれませんが」

そんな拓也を見ながらそう言うロード。

「才能？」

「君は能力を得てからそんなに時は過ぎていない・・・合ってるかな」

ロードがそう言う

「ああ、話すと色々あるんだけど・・・そうだな」

「直接能力を使う場合は、まだ荒削り・・・でも、感覚的には能力とうまくかみ合っている・・・それは君が生まれ持った才能だよ」

そう告げるロード。

「!？」

力を感じてからすぐに拓也達は、座り込んでいたモエを発見した。

「モエ！」

拓也の声が聞こえるなり振り向いたモエ。

「拓也さ・・・」

拓也の顔を見て気が緩んだのか、倒れるモエ。

「つと、何とか無事でしたね」

地面に頭を打つ前に、モエを支えたロード。

「・・・拓也さん。彼女を頼みます。あちらの彼女の方が危ないようですので」

と、拓也にモエを寄りかからせるロード。

「まさかミナモ・・・」

モエが座り込んでいた位置より前方、そこにはすでに力尽きたのかミナモが倒れていた。

「まだ完全には充填出来てませんから、一発ずつの治癒になります
が・・・」

そして、ロードはミナモとモエに治癒弾を放つのであった。

しばらく二人を安静にさせている間、これからの事について話し合う拓也とロード。

「ロードはこの通路を抜けた先に何かあるのか知ってるのか？」

そう尋ねる拓也。

「螺旋の街・・・組織内ではそう呼ばれていました。その名の由来は行ってみればわかります」

そう答えるロード。

「螺旋の街か・・・」

「ん・・・っ・・・」

と、そんな時意識を取り戻したモエ。

「あっ、拓也・・・さん。見間違いないじゃないですね」

そう言うモエ。

「当たり前だろ・・・それよりロード」

「そうですね・・・ずっとここにいるのも危険ですから・・・拓也さん」

そんな訳でミナモを背負う拓也。

「モエは歩けるか？」

「はい、目が覚めたら何だか身体が軽くて・・・あの、拓也さん・・・気になってましたけどその人は・・・」

そう聞くモエ。

「大丈夫だ、ロードは味方だし・・・俺もモエやミナモの回復もやってくれたしな」

そう言う拓也。

「そうだったんですか・・・ロードさん、ありがとうございます」

ロードにお礼を言うモエ。

「大したことはしていませんよ。では、行きましようか」

そして拓也達は、螺旋の街と呼ばれている場所に向かって進んでいくのであった。

第21話：螺旋の街（1）

「・・・」

拓也・ミナモ・モエは哑然とした顔をしていた。

「ここが螺旋の街ですよ」

そう告げたロード。

「いや・・・確かに・・・そういえなくはないけど・・・」

そう言う拓也。

拓也達が見ているのは、階層と階層の間にある螺旋階段の中心に街の景色が広がっていた。

「私、地下世界にいてぜんぜん知らなかったです」

そう告げるモエ。

「地下世界の人達は普段階層の移動はあまりしないでしょうから・・・」

そう言うロード。

「ロード、この街はとりあえず大丈夫なのか？」

尋ねる拓也。

「絶対とはいえませんが、あまり派手には行動できません……ですが街の外にいるよりは良いでしょうから」

そんな訳で螺旋の街へと入る拓也達。

「中は普通の街なんですね」

辺りを見渡しながらそう言うモエ。

「まずはお二人の完全な回復が先ですね。あと、拓也さんも」

そう提案するロード。

「わかってる……俺達……急ぎすぎてたからな……ノヴァとの戦いじゃ無茶しすぎたからな」

そして一行は螺旋の街の宿屋へ向かった。

「私は周囲を警戒していますからゆっくり休んでいてください」

そう告げると外へ出るロード。

「すみません……」

「!？」

突然謝りの言葉を口にしたミナモに驚く拓也とモエ。

「ミナモ……」

「・・・相手に助けられた上に私だけ力尽きて・・・情けないですよね・・・」

そう言うミナモ。

「そんな事は・・・ミナモは女の子だし・・・」

そう言う風に告げる拓也であつたが

「モエさんも女の子です・・・それに本来私の方が身体も丈夫なのに・・・拓也さんがいないと役に立てませんね」

「・・・」

ただじつとミナモの話を聞く拓也。

「今は二人とも疲れと傷を癒せ・・・俺には治癒なんて出来ないしな」

宿屋内がそんな事になっている中、ロードは螺旋の街で情報収集を行っていた。

「・・・やはりこの街は・・・やっかいな事になる前に下の階層にいきたいのですが・・・」

これから起こるかもしれないことを考えつつ、更に情報収集をしていくロード。

同じ頃・・・。

螺旋の街の外れ……。

その路地裏で拳をふるっていた青年がいた。

「この野郎！」

複数人いた男達は、その青年の拳で地に倒れていた。

「さすが期待通りの成長ですね……晃司君」

「てめえは組織の……こいつらけしかけたのはお前か！」

そう言う晃司と呼ばれた青年。

「私としては話し合いに行かせたのですがね……先に手を出したのは晃司君ですよ」

「黙りやがれガリユウ！お前達が俺達にしたこと……忘れたことはない！」

と、晃司の拳に炎が出現した。

「くたばりやがれ！」

炎の拳圧をを放つ晃司。

「やれやれ本当に熱い人だな」

と、ガリユウは鞘から剣を抜くとその剣を振り下ろした。

その直後、晃司の攻撃は真っ二つになりガリュウに届くことはなかった。

「先程も言いましたが私は話をしに来たんです・・・まあ、まだ抵抗するというなら後日・・・もう一人の方と話をしますが・・・」

そう告げたガリュウ。

「香奈には手を出すな・・・出しやがったら・・・」

再び拳に炎を灯す晃司。

「悪い話じゃありません・・・君にとってもこの街にとってもね・・・」

そう告げ不適に笑みを浮かべるガリュウなのであった。

第21話：螺旋の街（2）

無言でガリユウを睨みつけている晃司。

「ようやく聞いてくれる気になったようですね」

そう告げるガリユウ。

「条件がある」

それだけ言い放った晃司。

「いいでしょう。我々が出来る事ならば」

「香奈と街の奴らには手を出すな・・・あいつらはお前等に抵抗してる訳じゃねえんだ。やるなら俺だけにしろ」

そう言い放つ晃司。

「別に貴方がしっかりとやってもらえれば手は出しませんよ」

そう告げるガリユウ。

「・・・俺に何をやらせる気なんだよ」

用件を聞く晃司。

「この街に入り込んだ侵入者を捕らえていたただきたいだけですよ」

そう告げたガリュウ。

「その程度ならお前等で問題なくやれるだろうが」

「少し甘く見ていましてね・・・これ以上の戦力投下は避けたいのです」

そう説明するガリュウ。

「・・・わかったよ・・・一応香奈にも伝えておく・・・だけど香奈に余計なことしやがったら・・・」

「わかっていますよ・・・では、貴方達の頑張りに期待していますよ」

そう言うところから立ち去っていったガリュウ。

「って、その侵入者って奴の特徴とか聞いてねえじゃねえか・・・まあ、そんなに広い街じゃないしな・・・先に香奈へのメッセージを書いとくか」

そう言うとき晃司も路地から離れていった。

「ああ、手配を頼む・・・誰も街から出させないようにな。街の住人もだ・・・彼等が侵入者を捕らえればよし・・・出来なくても・・・」

と、人気のない場所で誰かと連絡を取っていたガリュウ。

「あとは本部の方で報告を待つとしようか」

そして、人気のない道を歩いていくガリュウ。

同じ頃、ロードは宿に戻りチャージ出来た治癒弾でミナモとモエの回復を終えていた。

「これであらかた全快しましたね」

微笑みながらそう告げるロード。

「ありがとうございます」

お礼を言うモエ。

「私なんかより拓也さんを全快にしてほしかったのに・・・」

「大丈夫だってミナモ・・・それにお前は空飛べるしな。いざって時は頼りにしてるからな」

そう言う拓也。

「・・・ありがとうございます」

そう呟いたミナモ。

「しかしながら・・・状況は決してよくはありません。すぐにでもこの街から出た方がよろしいでしょう」

そう言ったロード。

「どう言うことだ？」

「この街で組織との戦いになれば・・・出来る限りそれは避けたいですね」

「ああ、なら出口の方に行ってみようぜ」

そんな訳で拓也達は宿を出て街の出口の方に向かった。

そして、入れ違いになる形で晃司が宿にやってきたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1787g/>

エターナルアビリティ

2010年10月10日10時55分発行